例題
1-1

論理的文章の読解実践①

中埜肇『空間と人間』（一橋大）

時間
35分

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間の生涯を考えてみると、それはまず誕生に始まり、成長と成熟の過程を経て生殖を行い、そして老衰の後に死を迎える。個別的な例外は別として、こういう一般的な過程を見る限りにおいて、他の動物（どころか生物一般）の一生もほとんど同じである。つまりこのプロセスは人間と他の生物に共通する自然の現象的な事実である。そして私たちの高度に複雑な生活も、最も基礎的なレベルでは、こういう生物学的な事実に根ざしていることは否定できない。この事実を離れ、あるいはこれを無視した現実の生活などというものはおよそ考えることもできないであろう。そのことは、端的に言って、食欲と性欲とがなければ、私たちの生存が成り立たないということからも明らかである。この二つの欲望は人間が生きるための最も基本的な要因であると同時に、それらは、それ自体としては、人間と他の動物に共通するものであり、人間が動物にほかならないことの証しであるとも言える。言い換えると、事実のレベルで考えるかぎり、人間は他の動物とはなんら異なるところがないと言ってよい。それにもかかわらず、実際には人間の生活と他の動物の生存とは明らかに大きく違っている。両者の間には質的（本質的）な差異があると言ってもさしつかえはないであろう。私たちはその差異を、例えば熱烈なクリスチャンのように、宗教的な権威によって正当化されたものと確信してはいなくても、また人間と動物との間に本質的な差異を認めることを拒否する進化論に対して、常識的な賛意と理解を抱く程度にすぎないとしても、私たちは自分の考えていることや行動の仕方を正直に反省してみれば、やはり人間が他の動物とは根本的に異なっていることを、*インプリシットにせよ*エクスプリシットにせよ、意識せざるをえないし、またその差異を多かれ少なかれ認めているはずである。それがいわば私たちの思考や行動、知識やモラルを支えている良識というものである。思うに、どんなに熱烈な進化論信奉者でも、他の動物に対する人間の独自性を暗に認めないということはありえないであろう。

ではそのように人間を他の動物から区別する独自性とは何であろうか。もちろんこういう問いに対しては、直立二足歩行とか、火や言葉を使用するとか、技術を用いて労働するとか、さまざまの答えが与えられるであろう。これらの答えはそれぞれに正しいと言える。しかし、ここでは、人間の生き方は事実のレベルにとどまるものではないということをもって答えとしたい。つまり人間は単なる事実のレベルだけではなく、そのうえに別のレベルの生き方を持っているということである。

例えば人間の生涯の出発点である誕生について考えてみても、それはたしかに受胎・妊娠・出産という生理的な現象（つまり事実）を核心に持っていることは言うまでもない。しかし、私たち自身がよく知っているように、人間の誕生は明らかにそれだけのものにはとどまらない。既に受胎の事実が知らされたときから、本人はもとより周辺のひとびとの心に喜び・不安・期待・願望などの（場合によってはこれらとは反対のベクトルを持つ）情念が生起し、それに伴ってさまざまの個人的・社会的な行動が喚起されることによって、受胎という生理的な事実にさまざまの意味づけがなされる。（それの最も極端な例は、西欧の宗教画に頻繁に見られる「受胎告知」というテーマであろう。あれはもちろん聖母マリアがイエスという特別の人間をみごもったこ

とを主題としているが、それよりもむしろおよそ人間の受胎そのものを聖化していると考えることもできる。）同じような意味づけは、妊娠や出産に伴う情念やそれをめぐるもろもろの慣習や儀礼的行動などについても認められる。そしてこのような意味づけは人間の全生涯にわたって、またその生活のあらゆる面について行われている。つまり人間の生活のなかには、常に自然の現象的な事実とともに、それを超えた意味が働いている。したがって人間は、事実と意味の二つのレベルの両方にまたがって生きているわけであるが、事実とは要するに自然現象であり、人間が他の動物と原理的に共有するものである（もっとも直立二足歩行にもとづく人間特有の生理学的な事実があることまで、ここで否定しようとするものではない）から、人間の生活をとくに人間的なものとしているのは意味にほかならないということになる。簡単に言えば、人間は意味によってこそ人間であるし、また人間となるのである。人間のあらゆる営みには意味がつきまとっている。

そのことは、例えば「食べる」という最も素朴で原初的な行動についても人間の食べ方と他の動物の食べ方がどれほど大きく違うかを考えてみれば明らかであろう。手指の使用ということも人間と動物を区別する重要な点であるが、それは直立二足歩行という人間に特有の生理学的な事実に由来するものであって、そのこと自体は意味のレベルのものではないと言えるから、これは別にして、人間の摂食行動に必ず付随する食器・調理・作法などについて考えると、そのいずれをとってみても、そこには人間に独特の文化というものが見られるし、文化とはまさに意味の表現にほかならないのである。（高等類人猿の摂食行動にも一種の文化を認める学説もあるが、ここではそれに立ち入ることはしない。）こうして私たちの生活は、その深奥部にいたるまで意味によって浸透されていることがわかる。

私たちの生活の場面はさまざまな姿やあり方を持った空間であるが、私たちはその生活空間のなかでいつも何らかの仕方で物および人と関わって生きており、その関わりのなかにも意味が働いている。というよりも、その関わりそのものが意味であるということが多いのである。

きわめて簡単な例について考えてみよう。いま私は書斎にいて原稿を書いている。その窓から隣の寺の木立が眺められる。また書斎のなかには机、椅子、書棚、書物、筆記用具、原稿用紙、インク壺（つぼ）、などがある。ところで坐（すわ）っている私の向（むこ）うに木立が見えるということは、その限りでは単なる事実かもしれない。しかし、私がそれを眺めながら、その枝に咲いた花を美しいと思い、その葉の緑に深い憩いを覚えるとすれば、その木立と私との関わりはもはや事実のレベルのものではなくて、意味のレベルに移っている。すなわち私と木立との関わりは単なる位置関係や、それを見るという認知関係に尽きるものではない。つまり事実関係を超えている。したがってこの関係を含む空間ももはや事実空間ではなくて意味空間となっている。ましてや書斎のなかにあるさまざまの物は、私にとってただそこに在るというだけではない。それらはすべて私が使用するもの、私にとって役に立つものであるが、さらにそこへ好悪の情念や価値判断や記憶・想像を伴うさまざまの想念が加わる。つまりひとつひとつが私にとって意味を持っている。そう考えれば、これらのものと私との関わりは意味以外の何ものでもないと言ってよい。あるいはいま執筆している私の周りにはいろんな音が響いている。現代の生活環境という空間には、物体だけではなく音響も充満している。しかもこの音が私たちにとって純粋に物理的な音響でしかないということは、ほとんど考えられないであろう。ある音は耳に快く響くし、他の音は不快である。またある音は何かの信号であり、別の音は人間の言葉である。こうして私たちの周辺に流れる音響にも意味がこもっている。（個人的な経験であるが、敗戦後しばらくの間、列車の汽笛や自動車のクラクションがモールス信号による言葉に聞こえたことがある。）物や音との関わりでさえこのように意味につきまとわれているのであるから、まして人との関わりのなかでは、意味を持たないものは考えられないといっても

過言ではない。このように見てくると、私たちの生活空間は意味に満ちているばかりでなく、空間そのものが意味となっていると言うこともできよう。

（中埜肇『空間と人間』による）

（語注）＊インプリシット＝implicit　暗黙の
＊エクスプリシット＝explicit　明白な

問　右の文章を要約しなさい（二〇〇字以内）。

200

例題 1-2

論理的文章の読解実践②

浅野智彦「消費社会とはどのような社会か?」(神戸大)

時間 50分

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

資本主義的諸社会の最も今日的な状況を表現するキーワードとして「消費社会」という言葉がよく用いられる。ではその言葉に込められた現代社会の特質とはどのようなものなのだろうか。

問の角度を少し変えて、こんなふうに問うてみよう。人々が日常的に消費社会を実感するのは例えばどんな場面だろうか、と。この問に対する一つの答えとして、広告との a セッショクをあげることができるだろう。現代社会は、商品の集積である以上に膨大な量の広告があふれかえる社会である。この社会の中で商品は、モノにせよサーヴィスにせよ、即物的な裸の姿で存在するのではなく、いつでも広告の紡ぎ出すさまざまな物語に包まれて人々の目の前に現れる。したがって商品が存在する場所は単なる経済的な市場ではない。それは、「幸福」「健康」「癒し」「やすらぎ」「愛」「家族団欒(だんらん)」「ワンランクアップ」「ほんとうの自分」等々無数の「物語」が織りなす独特の——夢のような——空間におかれている。商品がいつでもこの独特の空間の中で提示され、出会われ、購入されるということ、そこにこそ消費社会のあり方を理解するための手がかりがある。「夢のような」という表現を右で用いたが、それは、消費社会において各商品のまとう物語が外的な制約から二重の意味で自由であることを示すためだ。

第一に商品＝物語は、誰に対しても——正確には、支払いの用意のあるすべての者に対して——自由にアクセスできる場所におかれており、その意味でアクセスへの制限から自由である。誰であれこのミネラルウォーターを消費すれば「健康」の物語を享受できるし、誰であれこの式場で結婚式を挙げれば「ハッピーウェディング」という物語を享受できる、というわけだ。

第二に商品＝物語は、それが物語を通して魅力を発揮するかぎりにおいてその物質的素材のありようからは相対的に独立しており、その意味で物的な制約から自由である。「住宅」や「車」といったモノそのものではなく、それを通して提供される「やすらぎの住まい」「家族の団欒」などという物語がそれら商品の魅力の中核をなしているのである。

これら二つの自由のうち第一のそれは、ア 商品の持つ相対化・均質化の力としてよく知られているものだ。例えば*グラント・マクラッケンは伝統的身分制のシンボリズムを b ボウエイしようとする伝統的勢力の努力が商品化の力によってどのように敗退していったかを描き出している。そもそも伝統的社会において服装は身分制秩序を可視化するための文化的装置であり、逸脱や越境が生じないように c ゲンミツに管理されていた。ところが服装が商品化されると、本来の身分とは無関連な服飾の消費が行われるようになり、これはくり返し発せられた奢侈(しゃし)禁止令にもかかわらず身分の境界を越えて広まっていく。またもう少し後の時代になると、階級を示すステータスシンボルとして「古光沢」、すなわち長年使用した食器や家具のみが帯びる独特の風合いが戦略的に活用され、これこそが本物の上流階級に属する証(あかし)であるとされたのであるが、この戦略もまた古光沢商品を取り扱う市場の成立によって腐食されてしまったのである。このことを消費する人々の側から言えば、伝統的な諸制約から自由な「個人」としての消費者、社会的な諸規定から相対的に無関連な「人間」とし

ての消費者が市場に登場してきた、ということになろう。これら「個人」「人間」としての消費者は自分自身の「自然な」欲求にのみしたがい自由に商品を購入し享受する。

それに対して第二の自由が意味しているのは、まさにこのような「自然な」欲求それ自体からの離脱である。例えば*ガルブレイスの消費社会論に対する*ボードリヤールの批判は、この点に照準したものだ。ガルブレイスは、一九五〇年代以降のアメリカ資本主義を巨大資本による人々の欲求の大規模な操作・支配であると見なした。すなわち巨大化した生産力に見合う需要を生み出すために、企業はさまざまな広告戦略によって消費者の欲望に人為的なアクセルをかけ、人々が本来ならば欲しなかったであろうモノを購入させている、と。ここでは人間の欲求の自然性がまずは前提とされた上で、それが巨大資本によって不当に操作・支配され、その結果個々の消費者の主体性が疎外されているという点が批判の要点となっている。

ボードリヤールはこのガルブレイスの議論に対して三つの観点から批判を加えた。第一に、自然な欲求と人為的に操作された欲求との間に明確な境界線を引くことはだれにもできないだろう。例えば、消費者がテレビやセカンドハウスを購入する際の喜びを、誰が「疎外されている」と批判できようか。第二に、今日の消費は、商品の機能によって自然な欲求を充足させる過程というよりは、むしろ人々が互いに差異化を競う営みであると理解すべきである。いいかえるとそれは、個人内部の欲求が充足されるかどうかという観点からではなく、人々の間の相互差異化のゲームという社会的活動の観点から見られるべきものなのだ。第三に、企業の広告戦略は、個々の商品に対する欲求を生み出すのではなく、欲求を記号の系列に即応したシステムとして組織化するものだ。例えば*ラルフローレンの広告は、個々の商品に対する欲求を生み出すのではなく、無数の記号から織りなされるライフスタイル――ラルフローレン的なライフスタイル――に向けて欲求をシステム化する。

要するに、消費行為を、個人の「自然な欲求」とそれを充足する商品の「機能」との対応として理解することはもはや現実的ではないということだ。かつて欲求はその「自然性」をよりどころとしてさまざまな伝統的制約から自らを解放してきたのだが、消費社会はさらにその「自然性」それ自体からさえ欲求を自由にする。その結果、広大な欲求の空間が新たに開かれるのであるが、この新しい欲求に応える商品は――欲求が自然性から解放されたのに対応して――モノとしての機能から自由な存在となる。商品にとって重要なのは、その「機能」ではなく「記号」としての差異の表示だ。そしてこの記号は他の記号との連鎖において存在するものであり、一定の記号システムあるいは一つの物語（例えばラルフローレン的な生活という物語）を構成することになる。

かくして自然性から解放された欲求は、記号的差異の操作――つまりは広告戦略――によって生産システムの変数として操作され得るものとなり、資本は広告への出資を通して需要を自分自身の力でつくり出すような自己準拠システムとして作動しはじめる。この需要は、記号システム＝物語の提示を通して創出されるものであるから、イ商品の流通する空間は次第に物語空間へと変貌していくのである。

「機能」から「記号」へというこのような商品の転態の最も劇的なケースを、*内田隆三は、*GMの*フォードに対する勝利という歴史的エピソードのうちに見出（みいだ）している。フォード社が部品や組立工程を徹底的に規格化することによって、それまで高級品であった自動車を大量かつ安価に提供し、一時代を築いたのに対して、後発のGMは、デザインによる差異化（モデルチェンジ）と広告という戦略によって市場を制覇していった。そして一九二七年、ついにフォード社はGMに決定的な敗北を喫し、*T型フォードは生産停止にまで追い込まれてしまうのである。このエピソードはアメリカの資本主義が、新しい段階に入ったことを明瞭に示すも

のであろう。すなわち、「機能」ではなく「記号」の消費を軸とする段階に、また需要が資本によって外的な（自然な）制約ではなく自己準拠的に創出しうるものとなる段階に、つまり消費社会という段階に、である。

ＧＭの勝利というこのエピソードは、また、消費社会化が人々の現実感覚やアイデンティティにもたらす大規模な変容を予示するものでもある。そもそもウフォードの生産システムの要は、その徹底した機能性と合理性とにあったと評し得る。ところで機能性にせよ合理性にせよ、それらはある目標に対するdコウケンの度合いによって評価されるものであり、もし目標が明確に固定されていないならば、機能性も合理性もそれが測られうるための準拠点を失い、意味をもち得なくなるだろう。ではフォード・システムの場合この目標はどこに置かれていたのか。生産過程の外部にある「自然」に、あるいは人間に内在する「自然な」欲求に、というのがその答えだ。すなわちそこでは人間的な欲求の自然性を準拠点とした上で、その欲求をどれだけよく充足し得るか、という観点から合理性や機能性は測定されていたのである。それに対してＧＭの勝利は、この欲求を自然性から解放し、システムによって操作可能な変数へと組み替えたことに由来するものだ。

このフォード的な機能性や合理性に対する信憑（しんぴょう）は、実は、自動車の生産という領域に限定されたものではなく、近代社会がその発生以来もちつづけてきた世界像でもある。すなわち近代社会を特徴づけてきたのは――*ウェーバーが強調したように――世界を一貫して合理化していこうとする運動であり、またそのような徹底した合理化が可能であるという信念であった。それは、世界が全体として特定の方向に向かって進歩していくという世界観であり、世界がただ一つの論理の制御に服しているという世界観である。けれども消費社会化の進行にともない、このような一元的世界観は次第に後景に退き、かわって世界は多元的な論理によって構成されるものであるという感覚が浸透していく。*リオタールは、ポストモダンと呼ばれる社会状況を「大きな物語」の解体によって特徴づけたが、消費社会は「合理化」や「進歩」という大きな物語を解体する点でポストモダン状況の一環をなしていると言えるであろう。

このような現実感覚の変容と相即しながらアイデンティティのあり方も変容していく。*リースマンが「他者志向」と呼んだパーソナリティタイプは、この変容への最初の着目であろう。これは自らの行為を決定する際に、伝統に準拠する（伝統志向）のでもなく、自己の内部に確立された価値観や信念に準拠する（自己志向）のでもなく、他者の視線にそれがどう映るかということを準拠点にするような人々を指すものだ。伝統にせよ個人的信念にせよ、それらは世界と自分をある一貫した論理の下に眺めるものであるが、他者の視線は状況によって容易に変化するものであり、そこに一貫性を期待することは難しいだろう。他者志向の人々にとって、アイデンティティは状況に応じてその都度構成されるような流動的・多元的なものとなるのである。リースマン以降の消費社会化の進展は、他者の視線に映る自己像を操作するためにモノの記号的価値を利用する人々を大量に生み出すことになった。アイデンティティはこうして記号や物語の消費を通して構成・再構成されるような不断のプロジェクトとなる。精神科医大平健は、近年自分自身を語るのにブランド商品を語るというやり方をとる相談者の増加を指摘し、これを「モノ語り」の人々と呼んでいるのだが、これは消費社会的アイデンティティのeギガとして見ることができる。

けれども物語の多元化がさらに進行すれば、記号的価値自体が、多元化・細分化し、相互に不透明なものとなっていくであろう。エ消費社会の進展は、だから、他者志向さえをも次第に困難にしていくような過程なのである。

（浅野智彦「消費社会とはどのような社会か？」による）

（語注）
＊グラント・マクラッケン＝カナダの人類学者（一九五一～）。
＊ガルブレイス＝カナダ出身、アメリカ合衆国の経済学者（一九〇八～二〇〇六）。
＊ボードリヤール＝フランスの思想家（一九二九～二〇〇七）。
＊ラルフローレン＝世界的なファッション・ブランドの一つ。
＊内田隆三＝日本の社会学者（一九四九～）。
＊GM＝アメリカ合衆国の自動車メーカーの一つ、ゼネラルモーターズの略称。
＊フォード＝アメリカ合衆国の自動車メーカーの一つ。
＊T型フォード＝フォード社が大衆向けに開発・製造した自動車のモデル。
＊ウェーバー＝ドイツの社会学者（一八六四～一九二〇）。
＊リオタール＝フランスの哲学者（一九二四～一九九八）。
＊リースマン＝アメリカ合衆国の社会学者（一九〇九～二〇〇二）。

問1　傍線部ア「商品の持つ相対化・均質化の力」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問2　傍線部イ「商品の流通する空間は次第に物語空間へと変貌していく」とあるが、ここでいう「物語空間」とはどのような空間か。八〇字以内で説明しなさい。

問3　傍線部ウ「フォードの生産システムの要は、その徹底した機能性と合理性とにあった」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問4　傍線部エ「消費社会の進展は、だから、他者志向さえをも次第に困難にしていくような過程なのである」とあるが、どういうことか。本文全体の論旨をふまえたうえで、一六〇字以内で説明しなさい。

問5　傍線部a～eを漢字に改めなさい。はっきりと、くずさないで書くこと。

問5

a

b

c

d

e

問4

160

問3

80

問2

80

問1

80

例題
1-3

小説の読解実践

小川洋子『ことり』（東北大）

時間
30分

次の文章は、唯一の肉親であった兄を亡くした「小父（おじ）さん」の日々を描いている。兄は鳥のさえずりのような言葉を操る存在であり、その言葉を正しく理解できたのは「小父さん」だけだった。兄の死後、「小父さん」は、兄とともに小鳥を見に通っていた幼稚園の鳥小屋の掃除を定期的に行っていた。文章を読んで問いに答えよ。

鳥小屋の掃除に幼稚園へ通う以外の時間、小父さんはしばしば図書館で過ごした。公民館の二階にある、[1]こぢんまりした分館だった。借りるのは例外なく鳥にまつわる本で、図鑑や写真集や科学書はもちろん、わずかでも鳥に関わりのあるものを探しては順番に読んでいった。案外、借りるべき本は尽きなかった。野鳥の写真を撮影する方法を解説した指南書もあれば、色変わりしたコキンチョウの交配に生涯をかけたある小学校教師の伝記もある。ヨウムに言葉を理解させる研究レポートもあれば、白鳥に乗って旅をする少年のおとぎ話もある。孔雀（くじゃく）公園の飼育員、独房で文鳥を友とした死刑囚、密猟者、鳩（はと）料理専門店のシェフ、鳥の鳴き真似を得意とする口笛演奏家……。登場人物は多彩だった。

小父さんが立ち寄る時間帯、分館は空いていた。カウンターの向こう側に司書が一人、絵本コーナーの丸いテーブルに子供が二、三人、あとは書棚の陰に幾人かが見え隠れしているだけだった。天井は高く、蛍光灯の光は弱々しく、床は所々軋（きし）んで切ない音を立てた。南向きの窓には用水路に沿って延びる遊歩道の緑が映っていた。掲示板に張られた新着図書到着の案内も、本の背表紙の分類シールもどことなく黄ばんでいた。

いつしか小父さんは書棚の前に立ち、背表紙に目を走らせるだけで、求める本をパッと見つけることができるようになっていた。それを読みたいか読みたくないかは問題ではなく、大事なのはただ一点、鳥がいるかいないかだけだった。たとえそこに『鳥』の一文字がなかろうと、鳥とはどんなにかけ離れたタイトルであろうと、小父さんの目は誤魔化せなかった。本の奥深くに潜むさえずりがページの隙間から染み出してくるのを、小父さんの耳は漏らさず捕らえた。その一冊を抜き取り、ページをめくると、案の定そこには鳥の姿があった。分館に収蔵されて以来まだ誰の目にも触れていないページに、長く身を隠していた鳥たちは、ア「やれやれ」といった様子で、小父さんの手の中でようやく翼を広げるのだった。

「いつも、小鳥の本ばかり、お借りになるんですね」

ある日、新しく借りる本をカウンターに置いた時、突然司書から声を掛けられ、イ小父さんは狼狽（ろうばい）した。貸し出しカードを手にしたまま、しばらく声の主に視線を向けられなかった。

「ほら、今日の本もそう。『空に描く暗号』」

司書は本を受け取り、タイトルを読み上げた。

「渡り鳥についての本でしょう？」

その時初めて小父さんは司書の顔を見た。幾度となく分館に来ていながら、司書を意識したことなどなく、目の前の彼女とこれまでに何度くらい顔を合わせているのか、見当もつかなかった。しかし少なくとも彼女が、小父さんの読書の傾向を正しく把握しているのは間違いなかった。

「はい……」

仕方なく小父さんはうなずいた。自分が選ぶ本に気を配っている人間がいようとは思いもせず、不意打ちをかけられたようで[2]気後れがした。

「ごめんなさい。別に利用者の方の借り出し状況をいちいちチェックしているわけじゃないんです」

小父さんの動揺を見透かすように彼女は言った。

「ただ、ここまで一貫している方はそういらっしゃらないので、何と言うか、とても圧倒されているんです」

彼女は『空に描く暗号』の表紙を撫で、それから上目遣いにはにかんだ笑みを浮かべた。

思いがけず若い娘だった。若すぎると言ってもいいほどだった。ふっくらとした頬にはまだあどけなさが残り、首はか細く、化粧気のない唇は潤んでつやつやしていた。短く切り揃えられた髪は襟元で跳ね、無造作にめくり上げた事務服の袖口からは、白い手首がのぞいていた。

「ここに座っているとどうしても、誰がどんな本を借りるのかつい気に掛けてしまうんです。立派な老紳士が『不思議の国のアリス・お菓子大事典』をリクエストしたり、小学生の男の子がギリシャ哲学のシリーズを読破したり……。新着図書が到着すると、この本は誰の好みか、誰に相応しいか、勝手に思い浮かべます。たまにその予想がぴったり命中すると、自分が善い行いをしたみたいな気分になるんです。そしてある時気がつきました。この人は鳥に関わりのある本しか借りない、って」

まるでそれが素晴らしい発見であるかのような口調で、彼女は言った。小父さんはただあいまいに、「ええ、まあ……」と応じるしかなかった。

「一体どこまで[ウ]鳥の法則は続くのだろうかと、ずっとどきどきしていました」

そう話しながら司書は、小父さんの手から貸し出しカードを受け取り、ノートに書名と分類記号と利用者番号を記入した。几帳面で綺麗な字だった。

「一見、鳥と無関係な本だと、ちょっと心配になるんです。だから返却された時、そっとページをめくって、鳥を探します。見つけられた時は、なぜかほっとするんです」

外見の幼さとは裏腹に、彼女の声にはあたりの静けさを乱さない落ち着きがあった。絵本コーナーの子供たちはいつの間にかいなくなり、他の人たちは皆書棚の間に隠れて姿が見えなかった。彼女がなかなか『空に描く暗号』を手渡してくれないせいで、小父さんはカウンターの前に立っているよりほか、どうしようもなかった。

「でも、今日は心配ありませんね。渡り鳥の本だって、はっきりしていますから」

ようやく彼女は本の上にカードを載せ、小父さんに差し出した。どう反応していいか分からないまま、彼は黙ってそれを受け取った。

「ね、小鳥の小父さん」

と、司書は言った。あなたは小鳥の小父さんなのだから、そう呼んだまでです、とでもいうような素直な微笑が口元からこぼれていた。思わず小父さんは「えっ」と短い声を上げた。

「幼稚園の子供たちは皆、そう呼んでいますものね」

小さくうなずいたあと、小父さんはズボンのポケットにカードを突っ込み、本を脇に挟んだ。

「返却は二週間後です」

そう言う司書の声を背中に聞きつつ、小父さんは分館を後にした。

帰り道、日曜日で閉まっている青空薬局の、入口に引かれた白いカーテンの隙間から何気なく中を覗き、

*ポーポーが姿を消しているのに気づいた。小父さんは自転車を止め、もう一度よく確かめた。やはり、ポーポーの入っていた広口ガラス瓶はどこにもなかった。それがあったはずのレジ脇には、口臭予防のガムが置かれていた。

ポーポーがないだけで、そこは自分の知っている青空薬局とは違う場所のように[3]よそよそしかった。先代の店主は死に、天井のモビールと小鳥ブローチはもはや跡形もなく、結局ブローチにしてもらえなかったポーポーたちも、飛び立てないまま待ちくたびれて打ち捨てられてしまった。

これで、お兄さんがポーポーのために特別に選ばれた人間であったことが証明されたのだ、と小父さんは自分に言い聞かせた。お兄さんが死んだからこそ、広口ガラス瓶は撤去された。あの中から一本を選ぶ権利がある、唯一の人間がお兄さんだった。ささやかな薬局の片隅で羽を休めていた小鳥たちを、お兄さんは救い出したのだ。お兄さんにしかできないやり方で。

小父さんは再び自転車にまたがり、家路を急いだ。納棺の際、レモンイエローのポーポーをバスケットに納め、金具を閉じた時のパチンという音がよみがえってきた。言語学者の研究室へ向(むか)う汽車の中、終わりなく何度もその金具を開け閉めしていたお兄さんの震える指と、それを黙って見つめていた母親の横顔を思い出した。金具の音は、棺の蓋を閉める音よりもずっと正しく、お兄さんの死を証明していた。

自転車の籠の中で、借りてきたばかりの本がカタカタ鳴っていた。

「返却は二週間後です」

司書の言葉を、小父さんは声に出して言った。

「返却は二週間後です」

ペダルを踏む足に力を込め、もう一度繰り返した。本の立てる音と風の音に自分の声が紛れ、代わりに司書の声が耳元でよみがえってくるのを小父さんは感じた。[エ]彼女の声をもっとよく聞きたくて、更に力一杯ペダルを踏んだ。

（小川洋子『ことり』による）

（語注）＊ポーポー＝青空薬局で売っていた、包装紙に小鳥の絵が印刷された棒付きキャンディー。「小父さん」の兄は毎週このキャンディーを買い、包装紙がたまると貼り合わせて小鳥の形のブローチを作った。

問1　傍線の箇所1・2・3の意味を文脈に即して簡潔に記せ。

問2　傍線の箇所ア「『やれやれ』といった様子」には、「鳥たち」のどのような「様子」が表れているか。本文の内容に即して四〇字以内で説明せよ。

問3　傍線の箇所イに「小父さんは狼狽した」とあるが、「小父さん」はなぜ「狼狽」したのか。その理由を本文の内容に即して四五字以内で説明せよ。

問4　傍線の箇所ウ「鳥の法則」は何を指しているか。本文の内容をふまえて三〇字以内で説明せよ。

問5　傍線の箇所エ「彼女の声をもっとよく聞きたくて、更に力一杯ペダルを踏んだ」には、「小父さん」のどのような気持ちが表れているか。「小父さん」の心情の変化に着目して七五字以内で説明せよ。

問5

75

問4

30

問3

45

問2

40

問1

3	2	1

例題
1-4

随想の読解実践

武満徹「影絵の鏡」（東京大）

時間
30分

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

私がこれまでに作曲した音楽の量は数時間あまりにすぎない。たぶんそれは、私がひとつとしての意識を所有しはじめてからの時間の総量に比べれば瞬間ともいえるほどに短い。しかもそのなかで他人にも聴いて欲しいと思える作品は僅か数曲なのである。私は、今日までの全ての時間を、この無にも等しい短い時のために費やしたのであろうか。あるいは、私が過ごした時の大半が、宇宙的時間からすれば無にちかい束の間であり、この、惑星のただ一回の自転のために必要な時間にも充たない数時間の作品と、これからの僅かな時が、ひとつとしての私を定めるのであろうか、などと考えるのであるが、それは、もうどうでも良いことであり、いずれにせよ私がすることなどはたかが知れたことであり、それだから後ろめたい気分にたえず落ちいることもなしにやっても行けるのだろう、と思うのである。

寒気の未だ去らない信州で、棘のように空へ立つ裸形の樹林を歩き、頂を灰褐色の噴煙にかくした火山のそこかしこに雪を残した黒々とした地表を凝視めていると、知的生物として、宇宙そのものと対峙するほどの意識をもつようになった人類も、結局は大きな、眼には感知しえない仕組の内にあるのであり、宇宙の法則の外では一刻として生きることもなるまいと感じられるのである。

生物としての進化の階梯を無限に経て、然し人間は何処へ行きつくのであろうか。

八年程前、ハワイ島のキラウェア火山にのぼり、火口に臨むロッジの横長に切られた窓から、私は家族と友人たち、それに数人の泊り客らとぼんやりと外景を眺めていた。日没時の窓の下に見えるものはただ水蒸気に煙る巨大なクレーターであった。朱の太陽が、灰色の厚いフェルトを敷きつめた雲の涯に消えて闇がたちこめると、クレーターはいっそう深く黯い様相をあらわにしてきた。それは、陽のあるうちは気づかずにいた地の火が、クレーターの遥かな底で星のように輝きはじめたからであった。

誰の仕業であろうか、この地表を穿ちあけられた巨大な火口は、私たちの空想や思考の一切を拒むもののようであった。それはどのような形容をも排けてしまう絶対の力をもっていた。今ふりかえって、あの沈黙に支配された時空とそのなかに在った自分を考えると、そこでは（ア）私のひととしての意識は少しも働きはしなかったのである。しかし私は言いしれぬ力によって突き動かされていた。あの時私の意識が働かなかったのではなく、意識は意識それ自体を超える大いなるものにとらえられていたのであろうと思う。私は意識の彼方からやって来るものに眼と耳を向けていた。私は何かを聴いたし、また見たかも知れないのだが、いまそれを記憶してはいない。

その時、同行していた作曲家の*ジョン・ケージが私を呼び、かれは微笑しながらnonsense！と言った。そして日本語で歌うようにバカラシイと言うのだった。そこに居合せた人々はたぶんごく素直な気持でその言葉を受容れていたように思う。

そうなのだ、これはバカラシイことだ。私たちの眼前にあるのは地表にぽかっと空いたひとつの穴にすぎない。それを気むずかしい表情で眺めている私たちはおかしい。人間もおかしければ穴だっておかしい。だが私

を含めて人々はケージの言葉をかならずしも否定的な意味で受けとめたのではなかった。またケージはこの沈黙の劇に註解をくわえようとしたのでもない。イ周囲の空気にかれはただちょっとした振動をあたえたにすぎない。

昨年の暮れから新年にかけて、フランスの学術グループに加わり、インドネシアを旅した。デンパサル（バリ島の中心地）から北西へ四十キロほど離れた小さなヴィレッジへ*ガムランの演奏を聴きに行った夜のことだ。寺院の庭で幾組かのグループが椰子油を灯してあちこちで一斉に演奏していた。群衆はうたいながら踊りつづけた。私は独特の香料にむせながら、聴こえてくる響きのなかに身を浸した。そこでは聴くということは困難だ、音の外にあって特定のグループの演奏する音楽を択ぶことなどはできない。「聴く」ということは（もちろん）だいじなことには違いないのだが、私たちはともすると記憶や知識の範囲でその行為を意味づけようとしがちなのではないか。ほんとうは、聴くということはそうしたことを超える行為であるはずである。それは音の内に在るということで音そのものと化すことなのだろう。

フランスの音楽家たちはエキゾチックなガムランの響きに夢中だった。かれらの感受性にとってそれは途方もない未知の領域から響くものであった。そして驚きのあとにウかれらが示した反応は〈これは素晴らしい新資源だ〉ということだった。私は現地のインドネシアの人々とも、またフランスの音楽家たちとも異なる反応を示す自分を見出していた。私の生活は、バリ島の人々のごとくには、その音楽と分ちがたく一致することはないだろう。かといってフランスの音楽家のようには、その異質の音源を自分たちの音楽表現の論理へ組みこむことにも熱中しえないだろう。

通訳のベルナール・ワヤンが寺院の隣の庭で*影絵が演じられているというので、踊る人々をぬけて石の門をくぐった。急に天が低く感じられたのは、夜の暗さのなかで星が砂礫のように降りしきって見えたからであった。庭の一隅の、そこだけはなおいっそう夜の気配の濃い片隅で影絵は演じられていた。奇異なことに一本の蠟燭すら点されていない。影絵は精緻に切抜かれた型をスクリーンに映して宗教的な説話を演ずるものである。事実、その後ジャワ島のどの場所で観た影絵も灯を用いないものはなかった。私は、演ずる老人のまぢかに寄ってゆき、布で張られたスクリーンに眼をこらした。無論なにも見えはしない。老人の側に廻ってみると、かれは地に坐し、組まれた膝の前に置かれた多くの型のなかからひとつあるいはふたつを手にとっては呟くように説話を語りながらスクリーンへ翳していた。私は通訳のワヤンに訊ねた、老人は何のためにまた誰のために行なっているのか。ワヤンの口を経て老人は、自分自身のためにそして多くの精霊のために星の光を通して宇宙と会話しているのだと応えた。そして何かを、宇宙からこの世界へ返すのだと言ったらしいのだ。たぶん、これもまたバカラシイことかもしれない。だがその時、私は意識の彼方からやってくるものがあるのを感じた。私は何も現われはしない小さなスクリーンを眺めつづけた。エそして、やがて何かをそこに見出したように思った。

（武満徹「影絵の鏡」による）

（語注）＊ジョン・ケージ＝（一九一二〜九二）アメリカの作曲家。
＊ガムラン＝インドネシアの民族音楽。さまざまな銅鑼や鍵盤打楽器で行われる合奏。
＊影絵＝インドネシアの伝統芸能で、人形を用いた影絵芝居。

問1

「私のひととしての意識は少しも働きはしなかったのである」（傍線部ア）とあるが、それはなぜか、説明せよ。

（編集部注：解答欄は135ミリ×8ミリ×二行　五〇字～六〇字程度）

問2

「周囲の空気にかれはただちょっとした振動をあたえたにすぎない」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。

（編集部注：解答欄は135ミリ×8ミリ×二行　五〇字～六〇字程度）

問3

「かれらが示した反応は〈これは素晴らしい新資源（ニュー・ソース）だ〉ということだった」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。

（編集部注：解答欄は135ミリ×8ミリ×二行　五〇字～六〇字程度）

問4

「そして、やがて何かをそこに見出したように思った」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。

（編集部注：解答欄は135ミリ×8ミリ×二行　五〇字～六〇字程度）

問1

問2

問3

問4

例題
2-1

記述式問題の解答実践①

松嶋健「ケアと共同性――個人主義を超えて」（東京大）

時間
50分

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

「近代化」は、それがどの範囲の人びとを包摂するかによって異なる様相を示す。「第一の近代」と呼ばれるフェーズでは、市民権をもつのは一定以上の財産をもつ人にかぎられている。それは、個人の基盤が私的所有におかれており、財の所有者であってはじめて自己自身を所有するという意味での自由を有し、ゆえに市民権を行使することができるとみなされたからである。この制限は徐々に取り払われ、成人男子全員や女性に市民権が拡張されていく。市民権の拡張とともに今度は、社会的所有という考えにもとづき財を再配分する社会保障制度によって、「第一の近代」から排除されていた人びとが包摂され、市民としての権利を享受できるようになる。これがいわゆる福祉国家であり、人びとはそこで健康や安全など生の基盤を国家によって保障されることになったのである。それでも、理念的には国民全体を包摂するはずの福祉国家の対象から排除される人びとはつねに存在する。

人類学者が調査してきたなかには、国家を知らない未開社会の人びとだけではなく、すでに国民国家という枠組みに包摂されたなかで生きる人たちもいる。ただそこには、なんらかの理由で国家の論理とは別の仕方で生きている人たちがいて、国家に抗したり、その制度を利用したりしながら生きており、そうした人たちから人類学は大きなインスピレーションを得てきた。ここでは、国家のなかにありながら福祉国家の対象から排除された人びとが形づくる生にまつわる事例を二つ紹介しておこう。

第一の例は、田辺繁治が調査したタイのＨＩＶ感染者とエイズを発症した患者による自助グループに関するものである。タイでは一九八〇年代末から九〇年代初頭にかけてＨＩＶの爆発的な感染が起こった。そのなかでタイ国家がとった対策は、感染していない国民の感染予防であり、その結果すでに感染していた者たちは逆に医療機関から排除され、さらには家族や地域社会からも差別され排除されることになった。孤立した感染者・患者たちは互いに見知らぬ間柄であったにもかかわらず、生き延びるために、エイズとはどんなものでそれをいかに治療するか、この病気をもちながらいかに自分の生を保持するかなどをめぐって情報を交換し、徐々に自助グループを形成していった。

ＨＩＶをめぐるさまざまな苦しみや生活上の問題に耳を傾けたり、マッサージをしたりといった相互的なケアのなかで、感染者たちは自身の健康を保つことができたのだ。それは「新たな命の友」と呼ばれ、医学や疫学の知識とは異なる独自の知や実践を生み出していく。そこには非感染者も参加するようになり、ア ケアをする者とされる者という一元的な関係とも家族とも異なったかたちでの、ケアをとおした親密性にもとづく「ケアのコミュニティ」が形づくられていった。「近代医療全体は人間を徹底的に個人化することによって成立するものであるが、そこに出現したのはその対極としての生のもつ社会性」（田辺）だったのである。

こうした社会性は、福祉国家における公的医療のまっただなかにも出現しうる。たとえば筆者が調査したイタリアでは、精神障害者は二〇世紀後半にいたるまで精神病院に隔離され、市民権を剝奪され、実質的に福祉国家の対象の埒外（らちがい）に置かれていた。なぜなら精神障害者は社会的に危険であるとみなされていて、彼らから市

民や社会を防衛しなければならないと考えられていたからである。精神病院は治療の場というより、社会を守るための隔離と収容の場であった。

しかしこうした状況は、精神科医をはじめとする医療スタッフと精神障害をもつ人びとによる改革によって変わっていく。一九六〇年代に始まった反精神病院の動きは一九七八年には精神病院を廃止する法律の制定へと展開し、最終的にイタリア全土の精神病院が閉鎖されるまでに至る。病院での精神医療に取って代わったのは地域での精神保健サービスだった。これは医療の名のもとで病院に収容する代わりに、苦しみを抱える人びとが地域で生きることを集合的に支えようとするものであり、イ「社会」を中心におく論理から「人間」を中心におく論理への転換であった。精神医療から精神保健へのこうした転換は公的サービスのなかで起こったことであり、それは公的サービスのなかに国家の論理、とりわけ医療を介した管理と統治の論理とは異なる論理が出現したことを意味している。

その論理は、私的自由の論理というより共同的で公共的な論理であった。たとえば、病院に代わって地域に設けられた精神保健センターで働く医師や看護師らスタッフは、患者のほうがセンターにやってくるのを待つのではなく、自分たちの方から出かけて行く。たとえば、地域に住む若者がひきこもっているような場合、個人の自由の論理にしたがうことで状況を放置すると、結局その若者自身と家族は自分たちではどうすることもできないところまで追い込まれてしまうことになる。そのような事態を回避し、地域における集合的な精神保健の責任をスタッフは負うのである。そこにはたしかに予防的に介入してリスクを管理するという側面がともないはするが、そうした統治の論理を最小限化しつつ、苦しむ人びとの傍らに寄り添い彼らの生の道程を共に歩むというケアの論理を最大化しようとするのである。

二つの人類学的研究から見えてくるのは、個人を基盤にしたものとも社会全体を基盤におくものとも異なる共同性の論理である。この論理を、明確に取り出したのがアネマリー・モルである。モルはオランダのある町の大学病院の糖尿病の外来a シンサツ室でフィールドワークを行い、それにもとづいて実践誌を書いた。そのなかで彼女は、糖尿病をもつ人びとと医師や看護師の協働実践に見られる論理の特徴を「ケアの論理」として、「選択の論理」と対比して取り出してみせた。

ウ選択の論理は個人主義にもとづくものであるが、その具体的な存在のかたちは市民であり顧客である。この論理の下で患者は顧客となる。医療に従属させられるのではなく、顧客はみずからの欲望にしたがって商品やサービスを主体的に選択する。医師など専門職の役割は適切な情報を提供するだけである。選択はあなたの希望や欲望にしたがってご自由に、というわけだ。これはよい考え方のように見える。ただこの選択の論理の下では、顧客は一人の個人であり、孤独に、しかも自分だけの責任で選択することを強いられる。インフォームド・コンセントはその典型的な例である。しかも選択するには自分が何を欲しているかあらかじめ知っている必要があるが、それは本人にとってもそれほど自明ではない。

対してケアの論理の出発点は、人が何を欲しているかではなく、何を必要としているかである。それを知るには、当人がどういう状況で誰と生活していて、何に困っているか、どのような人的、技術的リソースが使えるのか、それを使うことで以前の生活から何をb アキラめなければならないのかなどを理解しなければならない。重要なのは、選択することではなく、状況を適切に判断することである。

そのためには感覚や情動が大切で、痛み苦しむ身体の声を無視してたとえば薬によっておさえこもうとするのではなく、身体に深く棲(す)みこむことが不可欠である。脆弱(ぜいじゃく)であり予測不可能で苦しみのもとになる身体は、同時に生を享受するための基体でもある。この薬を使うとたとえ痛みが軽減するとしても不快だが、別のやり

方だと痛みがあっても気にならず心地よいといった感覚が、ケアの方向性を決める[c]ラシン盤になりうる。それゆえケアの論理では、身体を管理するのではなく、身体の世話をし調(ととの)えることに主眼がおかれる。そこではさらに、身体の養生にかかわる道具や機械、他の人との関係性など、かかわるすべてのものについて絶え間なく調整しつづけることも必要となる。つまりケアとは、「ケアをする人」と「ケアをされる人」の二者間での行為なのではなく、家族、関係のある人びと、同じ病気をもつ人、薬、食べ物、道具、機械、場所、環境などのすべてから成る共同的で協働的な作業なのである。[エ]それは、人間だけを行為主体と見る世界像ではなく、関係するあらゆるものに行為の力能を見出(みいだ)す生きた世界像につながっている。

（松嶋健「ケアと共同性――個人主義を超えて」による）

問1　「ケアをする者とされる者という一元的な関係とも家族とも異なったかたちでの、ケアをとおした親密性」（傍線部ア）とはどういうことか、説明せよ。

（編集部注：解答欄は135ミリ×8ミリ×二行）

問2　「『社会』を中心におく論理から『人間』を中心におく論理への転換」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。

（編集部注：解答欄は135ミリ×8ミリ×二行）

問3　「選択の論理は個人主義にもとづくものである」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。

（編集部注：解答欄は135ミリ×8ミリ×二行）

問4　「それは、人間だけを行為主体と見る世界像ではなく、関係するあらゆるものに行為の力能を見出す生きた世界像につながっている」（傍線部エ）とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえて一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ（句読点も一字と数える）。

問5　傍線部a・b・cのカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a　シンサツ　　b　アキラめ　　c　ラシン

問5

a

b

c

問4

120　100

問3

問2

問1

例題
2-2

記述式問題の解答実践②

高橋和巳「〈邪読〉について」（京都大）

時間
40分

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

*『千一夜物語』は周知のように、大臣の娘姉妹が宮廷におもむき、夜ごと興味尽きぬ話を王にきかせてゆくという発想からなっている。そして、そのシャハラザードなる姉娘の話は、いわば萌芽増殖とでもいうべき形態をとり、たとえば旅をする一人の商人が道中不思議な三人の老人に会うと、その三人の老人がめいめいに自己の境遇を話し出して独立の物語となり、あるいは一人の登場人物がある状況に出くわして、「これは嘗つてあったある大臣と医者の話そっくりじゃ」と歎息すると、その大臣と医者の物語が不意に膨脹して独立の一篇をなすといった具合である。物語が物語を生み、登場人物が語り出した物語の中の人物がまた一つの物語を語り出す。土地に接触した茎から根がはえ、そこからまた茎を出し、その茎の一部からまた根がはえて独立する、ある種の植物の繁殖にそれは似ている。

察するに(1)こうした発想法の背後には、従来あまり問題にされないアラビア文化圏特有の存在論が秘められているのであり、それは彼らの生命観や歴史意識ともおそらくは無縁ではない。仏教に地獄の中に極楽がふくまれていて、その極楽の中にまた地獄があるといった思念があって、それが仏教文学の発想や存在論とかかわりがあるのと、多分同じことであろう。

いまここで私は存在論を問題にしようとしているのではなく、考えてみたいのは「読書について」であるが、『千一夜物語』をふと思い出したのは、かつて青春の一時期、私はこの物語の発想に近い読書の仕方をしていたことのあったのを想起したからである。

一時、痩身病弱だったことのある私は、暗い下降思念のはてに死の誘惑にとりつかれ、それから逃れるために手当りしだいに書物を読んだものだったが、それが何か確実な、具体的認識をうるためというよりは、*パスカルの言う〈悲惨なる気晴し〉に近かったために、逆に一冊の書物を読んでいる過程での思念の動きは、あたかも『千一夜物語』のように、一つの瘤の上にまた一つ瘤が出来るといった気ままな膨脹をした。

当時友人の一人に一冊の書物を読みきれば、その理解したところを見事に要約してみせねばやまない〈要約魔〉がいて、電車の中や街頭で彼の的確精密な要約を聞きながら、(2)しばしば自分の読書の仕方に対するある後ろめたさの念におそわれたものである。「あの本を読んだか」と聞かれ、嘘ではなく読んだ記憶があって、「ああ」と答えるのだが、想念を刺戟された部分や、小説ならば作中人物のある造形に共感を伴うイメージはあるのだが、どうしてもその友人がしてみせるようには、内容を整然と紹介したり説明したりできないのだった。後年、生活の糧をうるべく某新聞の無記名書評を担当したりしていた時、必要上、そうした技術も身につけたが、当時には、どうもその気にはなれず、また周囲にある事柄に関して及びがたい人物がいると、却って逆の性質を増長させてしまう交友心理もはたらいてか、私はますます妄想的読書にのめり込んでいった。やがて病は昂じ、一つの思念や想像が刺戟された時には、その思念や想像のがわに身を委ねて、あえて一つの書物を早急に読み切ることに執着しなくなっていった。あげくの果てには、人が死ぬのは、疾病や過労によって肉体的生命が涸渇するからではなく、想像の世界が縮小し消失した時、なにものかに殺されるのであるという私

かな確信すら懐くようになってしまったのである。

(3)これはむろん読書の態度としては、いわば〈邪読〉であって、読書はまず*即自有としての自己を一たん無にして、他者の精神に接するべきものであり、あるいは確実な、あるいは体系的な知識を身につけるために読むべきものであることは知っている。また客観的精神というものは、そうした過程を経なければ形成されず、また、そうでなければ、認識と実践の統一という美しい神話も成り立たない。

しかしすべて邪なるものには、悪魔的魅力があるものであって、常に正しく健全であり続けることは、おそらくは索漠として淋しいものなのではあるまいか。

私見によれば、ある領域に関して長ずるための唯一の方法は、半ば無自覚にそれに耽溺することであって、中庸というのはあくまで晩年の理想にすぎない。読書に関してもまた同じ。厠の中で何か読みはじめたために厠から出るのを忘れ、飯を食っている間ぐらい、考えごとをするのをやめなさいと両親にさとされても、生返事をしてあい変らず妄想し、なおさっきの続きを読んでいるといった耽溺がなければ、なんらかの認識の受肉はありえないという気がする。そして、それは客観的精神がある時期に芽ばえ育つこととは必ずしも矛盾しない。

あえて〈邪読〉について書きつづければ、こうした耽溺のあとには必ず〈忘却〉がやってくる。何を読んだのだったか、題名の記憶はありながらもその内容の痕迹がほとんど残らず、あたかもその時間が無駄であったように印象される。読んだ内容を可能な限り記憶にとどめているべき学問的読書や実務型の読書、あるいは次の実践や宣伝の武器としても、章句を記憶にとどめておくべき行動型の読書から言っても、この〈忘却〉は、はなはだしく迂遠である。せっかく読んで忘れてしまうくらいなら読まない方がまし、とも言える。だがしかし、(4)その〈忘却〉にも、意味があると私は言いたい気もする。

これは経験的に確かなこととして言えると思うが、もし創造的読書というものがあるとすれば、それは必ずこの忘却を一つの契機とするからである。

かつて*ショーペンハウエルが思考なき多読の弊害を説き、*ニイチェが文献学者から哲学者への転身に、その〈忘却〉の契機を積極的に生かしたことは周知のことに属するが、まこと読書は各自の精神の濾過器を経て、その大部分が少くとも顕在的な意識の上からは、一たん消失するということがなければ、精神に自立というものはなくなるかもしれない。

ものごとはすべて失いかけた時に、そのことの重大さを意識する。いま私が〈邪読〉についてしるすのも、率直に言えば、私自身がすでにその〈邪読〉の条件を大はばに失ってしまっているからである。*職業上の読書、下調べのための走り読み……。もっとも書物と縁が深いようで、少し心を許せば(5)読書の本質から遠くなる危険をもった生活が、おそらく私にかつてあった豊饒な時間を無限に愛惜させるのであろう。

むろん、そうであっても、なお〈邪読〉は〈邪読〉であり、一つの読書のあり方ではあり得ても、他の読書のあり方を排除すべき権利も理由もない。むしろ、人の顔がそれぞれ違うように、無限に多様な読書の態度がありえていいのである。

一冊の書物にほとんど救いを求めるようにして接する求道型の読書、具体的な生活上の知識や知恵を得るための読書、あるいは無目標なしかし存在の奥底からの渇望から発する読書等々。各人がその人の個性にあった読書のかたちを造り出せばいいのであろう。

そして人生がそうであるように、誰しもあれもこれもと欲し、理想はさまざまの読書の型をそれぞれの人生の時期に経過することにあるのだろうが、しかしまた人生そのものがそうであるように、人は一つの読書のあ

り方に比重をかけたまま、その生を終らざるをえないのであろう。

（高橋和巳「〈邪読〉について」による）

（語注）＊『千一夜物語』＝『千夜一夜物語』や『アラビアン・ナイト』の名称でも知られるアラビアの説話集。

＊パスカル＝フランスの数学者、自然哲学者、神学者（一六二三～一六六二）。遺稿集『パンセ』の中で、悲惨な境遇を考えることから意識をそらすことを「気晴し」と呼んでいる。

＊即自有＝ドイツの哲学者ヘーゲル（一七七〇～一八三一）の用語。「即自存在」ともいい、他者との関係によらずに、それ自体として存在するもの。以下の本文にある「客観的精神」、「認識と実践の統一」もヘーゲル哲学を意識したもの。

＊ショーペンハウエル＝ドイツの哲学者（一七八八～一八六〇）。

＊ニイチェ＝ドイツ出身の文献学者、哲学者（一八四四～一九〇〇）。

＊職業上の＝当時、筆者は大学で中国文学を講じつつ、作家として活動していた。

問1　傍線部（1）はどのような発想法か、説明せよ。

（編集部注：解答欄は140ミリ×10ミリ×二行）

問2　傍線部（2）について、筆者が「ある後ろめたさ」を感じたのはなぜか、説明せよ。

（編集部注：解答欄は140ミリ×10ミリ×三行）

問3　傍線部（3）のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。

（編集部注：解答欄は140ミリ×10ミリ×四行）

問4　傍線部（4）のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。

（編集部注：解答欄は140ミリ×10ミリ×四行）

問5　傍線部（5）について、筆者にとっての「読書の本質」とはどのようなものか、本文全体を踏まえて説明せよ。

（編集部注：解答欄は140ミリ×10ミリ×四行）

問5

問4

問3

問2

問1

例題
2-3

選択式問題の解答実践

田辺明生「グローバル市民社会」（早稲田大）

時間
30分

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

人間の生き方とは、畢竟（ひっきょう）、ほかの人や生物やモノといかなる関係性をもつかということであろう。そこではまず個人があって関係をつくるのではなく、まず関係性のネットワークがある。人間主体は関係性のネットワークのなかの結節点としてあり、その自他の関係性に応じて、その主体のあり方も変化する。現代社会の課題には巨視的にみれば、貧困・差別・紛争・暴力といった社会問題と、資源エネルギー問題や地球温暖化といった環境問題の二つがあるが、それらはつきつめればそれぞれ人と人そして人とモノの関係性の問題である。そして、こうした問題を解決するためのよりよき関係性の探究は、社会経済と技術そして政治の問題である。このなかで、個々のセクシュアリティから地球環境までを含み込んだ、グローカルな「関係性の政治」をいかに活力に満ちた効果的なものとできるかが問われている。

この問題を検討するにあたって着目すべきは、市民権に、人間の同一性にもとづく平等だけではなく、人間の差異にもとづく多様性をとりいれようとする「差異づけられた市民権」という考え方である。ここで実践的に大切なのは、[1]多様なる人びとが差異を相互尊重しつつ、その差異づけを越えてお互いに交渉し、理解し、変容する機会を設けることであろう。つまり真に重要なのは、差異づけられた主体を通じて、他者と出会うことなのである。こうした他者との出会いこそが、差異づけを、権力的統治の道具ではなく、深い多元性を獲得するための社会的資源へと転換するために求められる。

こうした可能性を考えるために、ここでは「方法としての主体」を立ち上げ、「可能性としての他者」に出会うことを提起したい。これこそが現代世界において有意義な「関係性の政治」を可能にする作法であると考えるからである。

現在のポスト・ポストコロニアル時代に、支配的な市民主体から差異づけられた「異質なるもの」としての位置づけをあえて引き受け、「方法としての主体」を立ち上げることにはどのような意味があるのだろうか。その意義は、ヨーロッパ・都市・ブルジョワ・男性・キリスト教徒を中心とする帝国的・植民地的な支配構造を脱構築し、新たな関係性と主体性を打ち立てることである。ただしこれはあらかじめ定められた目的を達成するための手段ではなく、あくまで、自己が自己のおかれた関係性に働きかけていく開かれた過程であることには注意しなければならない。目的を達成することではなく、自己のあり方そして自他の関係性が生成変化していくことこそが重要である。いいかえれば、「方法としての主体」は、常に自己変容を含んだ運動あるいは過程そのものとしてある。

「異質なるもの」として名指された受動的な位置づけは、自らが選び取ったものではない。しかし、そもそも（ポスト）帝国的・植民地的な状況において、主権的な市民的主体の構築でさえ、人種・階級・ジェンダー・宗教等を通じた非対称的権力関係によって支えられていたのである。現状の支配関係のなかで与えられたカテゴリーをとりあえず引き受け、「方法としての主体」に反転することによって、その立ち位置から、そうしたカテゴリーのおかれた主客の関係性自体に働きかけていくことが可能になる。これは例えば、植民地インドに

おいて、権力から与えられたカーストや宗教にかかる諸カテゴリーが、「統治される人びとの政治」の基盤となっていったようにである。

ただしその可能性は、チャタジーのいうような「要求の政治」――自らの特殊性にもとづいて国家に政治的要求をすること――にとどまるものではない。主体を「方法として」立ち上げることの意味は、それを権益分配の受け皿とすることではなく、権力主体とその統治の客体という植民地的二項対立のあり方自体を揺るがすことにある。別言すればそれは、非対称的権力関係によって分断された自己と他者の〈あいだ〉に存在する潜在的なオルタナティブの可能性を顕わにしていくことである。それこそが、非対称的権力関係を再生産することなく、本当の意味で他者に出会うことであり、二分法に還元されえないような異質性のもつ豊饒さを発見することである。畢竟、権力関係は、外在的なものであるだけでなく、ひとりひとりの主体性そのものに内在的に潜むものである。自らの内なる帝国と植民地主義を揺るがし、自己変容するためにこそ、「方法としての主体」を立ち上げることは必要なのである。

ポスト・ポストコロニアル世界における「方法としての主体」の重要なカテゴリーの一つとして、[2]「方法としてのアジア」は理解できるだろう。近代的理念の実現を全きものとするためには、ヨーロッパがアジア・アフリカに対して一方向的な支配を押し付けるということではだめだ。といって、西洋の侵略に対して、東洋が抵抗するという、従来あったような図式も成り立たない。竹内好は、「西洋をもう一度東洋によって包み直す、逆に西洋自身をこちらから変革する、この文化的な巻返し、あるいは価値の上の巻返しによって普遍性をつくり出す」ことを提言する。いうまでもなく「アジア」は、「ヨーロッパ」の他者として恣意的に切り取られた単位であり、そこに何か実体として独自なものがあるわけではない。しかし、アジアを「方法として」立ち上げたうえで、ヨーロッパを「包み直す」こと、そして「巻き返す」ことは、「ヨーロッパとアジア」という二分法的枠組を崩しつつ、その双方を含みこんだような、より豊饒で普遍的なる新たな関係性の位相に至ろうとすることである。そのような意味で、「方法として」のアジアは、同時に自らの「主体形成の過程として」である。

近代の形成においてヨーロッパが主導的な役割を果たしたとしても、世界史的近代はヨーロッパが自律的につくったものではない。近代はグローバルな舞台においてつくられたのであり、それを可能にしたのは異種混淆（こう）的な出会いである。ヨーロッパはそうした異種混淆的な過程のなかから、アジアやアフリカを他者化することによって、主権的主体としての自己を構築したのであった。よって、ヨーロッパとアジアという二項対立的枠組を突き崩し、巻き返すことは、グローバル近代の異種混淆性に内包された潜在的可能性に立ち戻り、そこから新たな主体構築の可能性を輝かしめることである。「方法としてのアジア」の独自性は、それが、支配的な主体から与えられた「異質なるもの」としての客体的位置づけをあえて主体構築の場として引き受けること、そして、そこから自他の関係性自体に働きかけることによって、常に自己変容を含んだ運動あるいは動態そのものとしてあることではなかろうか。

＊

こうした自己変容のための「方法としての主体」を立ち上げることは、「ヨーロッパとアジア」という文脈だけではなく、「男性と女性」「エリートとサバルタン」「白人と黒人」などの、さまざまな権力的二分法の解体と主体の再構築において有用であろう。これらの二分法的枠組も、帝国的・植民地的な支配構造と深く結びついたものであることはいうまでもない。

例えば「女性」という「方法としての主体」を立ち上げることは、「女性」というカテゴリーを実体化する

ことではなく、むしろ「女性」という方法によって「男性」を巻き返し、包み直すことで、「男性と女性」というジェンダー・セクシュアリティの枠組そのものを解体し、人間の性的な異種混淆性を十分に認識したうえでの、より普遍的な人間理解と、自らの固有性に立った主体構築を可能にすることである。その過程においては、女性というカテゴリー内の多種多様性に目を向けるだけでなく、自他の関係性への働きかけを通じた自己変容が可能となり、「方法としての女性」を通じた自己認識と主体構築はより豊饒化するであろう。同じことは、「エリートとサバルタン」という階層的枠組、また「白人と黒人」といった人種的枠組において、「方法としてのサバルタン」や「方法としての黒人」を立ち上げる際にいえる。

こうした「方法としての主体」を立ち上げる際には、[3]「可能性としての他者」に注意深くあらねばならない。自己構築・自己変容の過程は、常に自他の関係性の再編を基盤とするのであり、そのために他者の存在は決定的に重要である。ただ問題は、他者をどのような存在としてみるかである。

西洋の主権的主体を可能にしたのは、自己の反対物として措定された「他者」の存在であったことを前に指摘した。そうした「他者」は、自己ではないものとして否定的に固定化されたものである。それに対して、「可能性としての他者」とは、自己の反対物ではなく、自己もそうであったかもしれない、しかし自己とは異なる、別様の存在者なのである。そうした〈他者〉は、現存の枠組における主体でも客体でもない。具体的な何者であるより先に、世界における可能なパースペクティブを示すもの、つまり「ひとつの可能世界の表現」なのである。

ここでいうパースペクティブとは、精神に属するものではなく、身体に属するものである。ヴィヴェイロス・デ・カストロが指摘するごとく、「すべての存在者は、世界を同じ仕方でみている。変化するのは、それがみている世界なのである」。ここには、一つの自然をさまざまに異なるように解釈する「多文化主義」ではなく、多様なる身体に応じた多様なる自然が現れる「多自然主義」がある。〈他者〉は、自己とは別様の身体――ハビトゥスを構成するある情動の束――をもつ。何を食べ、どこに住み、どのようにコミュニケートし、何に喜びを感じるかといった情動や指向において、〈他者〉の身体は特異・固有である。民族、宗教、ジェンダー、セクシュアリティとは、さまざまな身体の差異を表現しようとするカテゴリーである。こうした異なる身体をもつ〈他者〉の前に現れる世界は別様である。それぞれの身体の経験する情動や感覚、つまり生きる世界が異なるからだ。このような意味で、〈他者〉は、この世界の潜在的可能性が一つのかたちをとって現れたものなのである。

こうした〈他者〉に出会うことを通じて、わたしたちは、生の別様の可能性の存在を学ぶことができる。そこにわたしたちの世界はより多元化し、豊饒化する。ただし、こうした〈他者〉は、自己の有する既存の意味枠組の内部では理解不可能であることに十分に注意しなければならない。わたしたちがなすべきことは、「他者を説明することではなく、わたしたちの世界を多元化することである」。それは、他者を解釈することでも、他者のように思考することでもなく、他者の他者性を尊重しつつ、[4]他者と共に生きようとすることによって可能となる。

（田辺明生「グローバル市民社会」による）

問1　傍線部1「多様なる人びとが差異を相互尊重しつつ、その差異づけを越えてお互いに交渉し、理解し、変容する機会を設けること」とあるが、その具体的実践例として著者の主張に最も沿うものを次の中から一つ選べ。

イ　人事考課に際して、同等の評価を受けた者が複数いる場合には女性を優先して昇進させる方針を打ち出した会社において、この方針に疑問を抱いた数名の従業員が、この方針の妥当性を問い直すことを通じて両性というジェンダー・セクシュアリティの固定観念そのものを議論する場の設置を会社に要請し、これへの参加を同僚に呼び掛けた。

ロ　西欧近代が創出した人権の理念は、西欧社会の中でもなお確立されているわけではなく、不断に追求されるべき規範性と普遍的妥当力を持つという認識のもとに、学生たちが、アジア世界に属する日本においても西欧との歴史的経路の違いや文化的政治的相違を克服して、人権を尊重し確立する主体を形成すべく、人権ＮＧＯを立ち上げた。

ハ　「外国人入店お断り」という注意書きを出している飲食店を目にした地元住民が、人・物・サービスの自由な移動を核とするグローバル市場化の動向と逆行するものとしてこれを問題視し、平等な経済主体同士という「方法としての主体」を立ち上げ、日本人の内なる差別意識の払拭を通じて、自由な市場取引関係を確立すべきだと商店街に訴えた。

ニ　政治的課題の優先度を経済成長に置くか、環境保護に置くかで対立する政治家が、二〇五〇年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにしないと、その後どのような温暖化対策を講じても手遅れとなる、という科学的知見を共有することにより、政治的立場の差異を尊重しつつもそれを乗り越えて、超党派の気候変動対策連盟を結成した。

ホ　政・官・財界のリーダーとして社会を教導するエリート層が、彼らの社会的地位を資産として次世代へ相続することによりその支配構造を再生産しようとする中で、これに批判的な非エリート層が、自分たちの欲求を分かり易く代弁する政治家を支持することを通じて政治の世界に対立構造を持ち込み、非対称的権力関係を反転させようとした。

問2　本文で論じられる「方法としての主体」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　「異質なるもの」として差異づけられた他者と、その差異づけを支えている支配的主体としての自らの位置づけを直視し、自己批判を介することで、豊饒な異質性の一部として自己を肯定しようとする運動・過程。

ロ　これまでの歴史のなかで築き上げられてきた非対称的権力関係それ自体に働きかけ脱構築するために、まず自らの異質性を引き受け、それを政治的主張の根拠とすることで主体と客体を反転させるような運動・過程。

ハ　自己の特殊性を、統治者と被統治者の不平等な関係における政治的交渉の資源として活用することで、深い多元性を打ち立てるための新たな主体性を獲得し、より対等な自他関係を切り拓こうとする運動・過程。

ニ　人間の多様性・異質性のもつ豊饒さを発見するため、支配――被支配を前提とした既存の植民地的枠組を放棄し、過去に囚われない新たな自己を発見することで本当の意味での他者に出会うことを模索する運動・過程。

ホ　権力関係は外在的なだけでなくひとりひとりの主体性にも内在し得るものであると認識し、その関係を克服するためにその一部をなしている自分自身をまず変え、自他関係の新たな可能性を開こうとする運動・過程。

問3　傍線部2「方法としてのアジア」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　近代の形成において決定的な要素であったはずの異種混淆性の意義を振り返り、その過程に根差した潜在的可能性に働きかけることで新たな主体構築へと自己を開くためには、支配的主体としての西洋とその客体としての東洋という歴史性を捨て去る必要があるということ。

ロ　西洋を中心に置く近代的価値観に照らしてアジアは遅れた存在として位置づけられてきたが、そのような与えられた価値に抵抗するのではなく、西洋的価値をも含み込むようなより普遍的な価値の可能性をアジアの歴史に見出すことで世界の認識枠組を刷新し得るということ。

ハ　近代世界の成立に主要な役割を果たしたのは西洋であり、現代世界の暴力や貧困、差別などの問題は西洋的価値と近代的主体の解体なしにはあり得ない以上、西洋の対比的存在として位置づけられてきた東洋を思考の基盤とすることが二分法的枠組だけでなく西洋自体の変革にも不可欠だということ。

ニ　ひとりひとりの主体性にも織り込まれているヨーロッパ中心の近代史観に基づく権力関係の再生産から自己を解放するには、ヨーロッパの他者というアジアを前提とするのではなく、グローバルな舞台からアジアを捉え直すことでヨーロッパを客体化するという視点の転換が重要な契機となるということ。

ホ　アジアとヨーロッパという区別は実体として非歴史的に存在するのではなく、異種混淆的な出会いを通じてヨーロッパの覇権的地位とともに構築されたものであり、その異種混淆性がもつ潜在力を再認識することで、アジアは従来の関係性を覆し全く別の主体を模索するための足場となり得るということ。

問4　傍線部3「「可能性としての他者」に注意深くあらねばならない」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　主権的主体としての自己を支えるために他者を否定性に閉じ込めてしまうのではなく、具体的な他者の情動や指向を尊重しその生に接近することでより直接的な他者理解や共感が可能となるような自己変容に自らを開くことが重要だから。

ロ　自己のネガティブな側面を他者に転嫁することで自己の優位性を捏造し支配関係を維持するという営みから脱し、他者の視点から自己の世界をいまいちど捉え直すことで自己の情動や感覚を再構成することが重要だから。

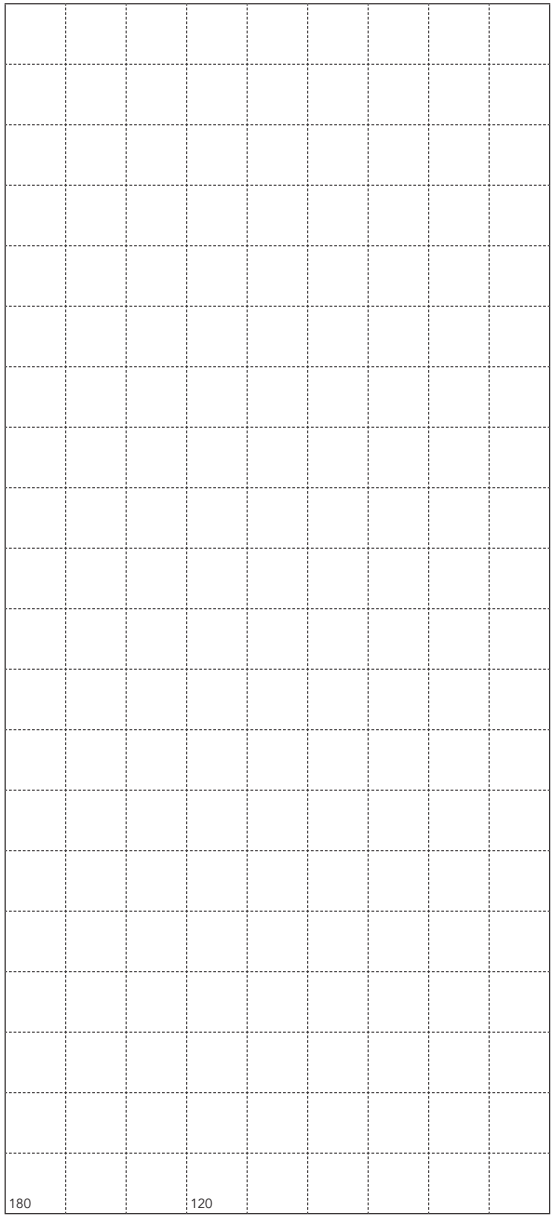
ハ　他者の存在を自己の鏡像とすることで他者を単なる客体の位置に固定してしまうのではなく、特異で固有の身体を持つ他者に出会いその生を追体験する機会を得ることで、世界の多元化の可能性を追求することが重要だから。

ニ　支配的主体との差異化を通じてあらかじめ固定された枠組のなかで他者を認識することから距離をとり、異なる身体を持ち異なる世界を生きる異質なものとの出会いによって、世界の別の在りようを学ぶことが重要だから。

ホ　自己同一性の根拠とするため他者の存在を自己の反対物として限定し、他者を社会的に抑圧してしまうのではなく、抑圧され不可視化された自己と他者との共通点を具体的に見出すことで、新たな自他関係の可能性を構築することが重要だから。

問5　傍線部4「他者と共に生きようとすること」とあるが、それはどういうことか、またそれによって何が期待されるか。本文中で区別されている「他者」と〈他者〉を用いて、一二〇字以上一八〇字以内

問5



問4

問3

問2

問1

で説明せよ（句読点や括弧・記号などもそれぞれ一字分に数え、必ず一マス用いること）。

例題
2-4

心情・表現説明型設問の解答実践

島木健作『バナナの皮』（大阪大）

時間
30分

次の文章は、島木健作の小説『バナナの皮』（一九三五年発表）の一部である。五月末のある日、上野駅から汽車に乗ろうとしていた「私」は、護送されている囚人を見かける。客車に乗りこむと、「私」と向かい合った席にその囚人が役人（看守）と共にやってくる。これを読んで後の問いに答えよ。なお、本文は一部改変したところがある。

囚人は窓ぎわに座り、役人はその横に座ったから、私と囚人とは膝をつきあわすほどにして顔を合せたわけである。彼は座ると同時に、編笠をとり、朝の光りにみちた窓外に向いてまぶしそうに目をまたたいた。さわやかな風に面を吹かれ、着ものの上からそれとわかるほどに胸をふくらませ、また大きく息を吐き出すのだった。私はそういう境遇にある人にたいする特別な見方をもってではなく、普通の人間にたいするように彼の顔を正視した。まだ若い青年だった。はじめてそのうしろ姿を一瞥したとき、しっかりした骨組にもかかわらず、肩のあたりの線に、どこかまだ一人前になりきらぬ、初々しいものを見たのであるが、それをそのまま裏書するような実際の彼の若さであった。皮膚は荒れ、このような生活にあるものに特有な、澱んだ汚水のような色艶だったが、光り失わぬ黒く澄んだ眼は、*検査をすぎてまだ間のない頃のものをおもわせた。かすかに口を開き、そのときはもう動き出した汽車の窓外に、刻一刻かわって行く風物にうっとりみとれているさまは、あどけないものをさえ含んでいる。ふいに彼は小刻みに膝をひょいひょいと動かしはじめた。今の彼としてほかには表現し得ない(1)心の喜びなのであろう。太く冷たい鉄の手錠のしかと喰い込んでいる双の手首が、その膝の動きにつれて無心にかすかにふるえている。……

気がついてみると、しかし、彼の存在に心をとられているのは決して私一人ではなかった。この車内にある大半のものがそうであったといえる。彼がはいって来た当座、おびえたように身をすくめたものたちも、自分たちの座席から遠くはなれた今の彼を見るときは、安堵の胸をなでおろすと同時に、好奇心が頭をもちあげて来たようである。用もないのにぶらぶら私たちのそば近くあるいて来、じろじろと彼を見て、それから帰って行くものがあった。多くはただ物珍しそうな、罪のない眼いろであったが、なかにははげしい憎悪に燃えて、生き身の皮まではぎ取りそうな、無慈悲な眼つきで見据えるものもあった。私たちとは別の側に、はすかいに席をしめていた、四十歳前後の親方ふうの男など、そのうちの主な一人であった。おそらくは土木*請負師などのたぐいであろう、大兵肥満の洋服姿で、赤皮の編上げをはき、ズボンの裾は靴下のなかにおしこんで、靴下止めを上からしていた。右手に一つ、左手に二つ金の指輪をはめ、はっはっと大口あけてわらう時の口のなかもお神楽の獅子にそっくりなら、胸間にぶら下げている金の鎖の太さもなみなみのものとはおもわれぬ。彼は六つか七つぐらいの男の児をひとり連れていた。子供は父親の膝の上にいて、甘えている。かの囚人の方にちらりと眼をくれ、子供らしく誇張した表情で、おびえたように父親の胸に顔をうずめ、足をばたばたさせるのであった。父親は幅広く厚い胸でがっしりと子供をささえ、あたりのもののふりむいてみるほどの大ごえをあげてわらうのである。

「こわくない、こわくない、何がこわいもんかい、お父さんがついてらあな。」

子供は父親の首に両手をまきつけて、耳もとに口をよせ、ひそひそとなにかささやいた。

「うん、うん、わるいことさえせなんだら何もこわいこたアありゃしない。わるいことをすりゃな、おまわりさんがしばってつれてって、あんな着ものを着にゃならんぞ。何？　どんなわるいこと？　はっはっ、そりゃ坊や、いろいろあらあな。どろぼう、火つけ、人ごろし……」

私はおもわずはっとして、なにか、自分に直接関することででもあるように、顔いろをかえた。とっさの間、私は目の前のかの囚人の顔を正視する勇気を失った。しかし、私はおもい切って見たのである。「どろぼう、火つけ、人ごろし……」のこえがひびいたとき、今まで窓の外ばかり見ていたわかものは、ぎくりとしたふうで、こえのする方をちらりと見た。すぐにもとへ顔をかえしたが、一瞬のうちにその顔は、今までとはまるでべつなものになってしまっていた。今までのあどけない、子供らしさは影を消して、急にいくつか年をとった、萎んだものになっていた。暗く陰惨な、典型的な囚人のそれに変っていたのである。心を鎮めようとし、依然、窓の外を見ているが、手の指先は、それとあきらかに見えるほど、ぶるぶるふるえているのだった。……

私も亦、(2)読もうとひろげた新聞を持つ手のふるえのどうにもとどまらぬ感情の荒立ちをおぼえたのである。私はかの田舎紳士をにくんだ。その肥えふとった胴体を踏みにじってやりたい切ない衝動に身をおいた。たった一つ、――若い囚人の顔に今が今までうかんでいた、ちょうどこの五月の季節のように、明るく朗らかな表情を、一瞬のうちに萎えしぼませてしまった、――はげしい毒素のような、彼のその一と言のためにである。私はこの年若い囚人が、何の罪で、何年の刑期で、どこへ送られて行くかを知らぬ。しかしながら私は、ついさっきまで彼の顔にうかんでいたような表情が、このような生活にあるものの上に、容易に見得るものではないことをよく知っている。それは一年に一度か、二年に一度、何かの折にひょいとやってくる程度のものである。その生活にあるあいだじゅう、何年居ろうと、ついにそういうことのない不幸なものもある。囚われている人間であることを、全く忘れている瞬間でないならば、そういう表情が彼の上にあらわれるということはないのである。

どのくらいか時間がたった。側につきそっていた役人は、その時、時間を見、囚人をうながし立たしめた。ここにあってもちゃんと時間をきめてするらしい不浄場へ行く時が来たのである。囚人は気のすすまぬふうに立ってあるきだした。向うはしの不浄場の前で、手錠の鍵をはずしてもらい、そこにあるあいだ、役人はその前に立って待つのであった。用をすました囚人は、ふたたび手錠に腰縄姿でこっちへあるいて来た。車内の人々は一せいに彼に鋭い視線を放った。(3)幾十の射るような視線に裸にされ、何よりもさきに蒙った心の痛手があって、若ものはおどおどし、足もともどこかたよりなげだった。

さきの請負師ふうの田舎紳士と、子供は、そのときはもう、一向そしらぬふうに、バスケットを下し、果物やら、菓子やらにさかんにパクついていた。ふりかえって、近づいて来るわかものをじろりと見た男は、今喰い終ったバナナの皮を、通り路にすてたのである。すてられたバナナの皮は、ちょうど通路のまんなかにおちた。紳士はなんの気もなく、ただ無造作にすてたのかも知れぬ。しかし、横をむいてにやりとわらった顔の卑しさにはなにかを期待して心にほくそ笑んでいるところがあり、見ていた私は、おもわずはっと緊張した。何か起りそうな予感にわれ知らず腰をうかせていた。すると、その瞬間だった。ちょうどそこまで来た囚人が、地ひびきするほどの音を立ててのけさまにうしろにひっくりかえった。いうまでもなくバナナの皮に足をとられたのである。あわてて起き上ろうとし、ふたたび中途でひっくりかえった。両手の自由のきかぬ彼は三度四度と身もだえした。どっと、いろとりどりの笑声が、狭い車内にひびきわたった。

「馬鹿野郎！」

冷酷にののしって、看守の手が、帯にかかり、はじめてわかものは立上ることができたのである。

笑声はなおもしばらくつづいていた。しおれたわかものが、席へもどって来てのちも、くっくっと含み笑う、若い女などの、世にこれほどに冷酷なものも少ないであろう笑いがきこえていた。が――間もなく、それらのこえはぴたりとやんでしまった。かつてない静けさに車内はしーんとひそまりかえった。

若いかの囚人の口をもれて、すすり泣きのこえがきこえてきたのである。喰いしばった歯のすきまから、それはもれて来た。はじめはおさえにおさえた低い音だったが、ついにそれはおさえがたくどっとあふれた。子供のような嗚咽のこえがしだいに高くなって行くのであった。涙のしずくが頬をつたわった。ふとみる、彼の頭の耳に近いあたりには、倒れた拍子に座席のかどにうちつけたものだろう、髪の毛の上に血さえにじんでいる。手錠の喰いこんだ手首は、起き上ろうともだえた時に傷ついたものだろう、いたいたしく皮がむけ、ここにも血しおがふきでている。……

汽車は走り、車輪のひびきはごうごうと今しも鉄橋を越えた。そのひびきのあいまに、すすり泣きのこえはなおもきこえる。(4)厳粛なものに打たれて車内にはコトリとの音もしなかった。私は硬ばった真青な顔をして、彼ひとり今なお平然たるかの肥大漢の横顔を喰い入るように見すえていた。富んで無智なるものの、冷酷さ、残忍さを見ること、今までに私は必ずしも少なしとはしない。しかしこの時ほどにはげしいいきどおりに身を灼いたことはいまだかつてなかったのである。

（語注）＊検査＝二十歳に達した成年男子が義務づけられていた徴兵検査。
＊請負師＝下請けの職人たちを束ねる役目を果たす仕事。

問1　傍線部（1）「心の喜び」とあるが、「私」は若者がどのような「喜び」を感じていると考えているのか、わかりやすく説明せよ。
（編集部注：解答欄は173ミリ×36ミリ）

問2　傍線部（2）「読もうとひろげた新聞を持つ手のふるえのどうにもとどまらぬ感情の荒立ちをおぼえた」とあるが、なぜこのように「私」は感じたのか、その理由をくわしく説明せよ。
（編集部注：解答欄は173ミリ×36ミリ）

問3　傍線部（3）「幾十の射るような視線に裸にされ」とあるが、このような表現にはどのような効果があると考えられるか、説明せよ。
（編集部注：解答欄は173ミリ×36ミリ）

問4　傍線部（4）「厳粛なものに打たれて車内にはコトリとの音もしなかった」とあるが、「私」は多くの乗客たちの心理をどのように考えているのか、「厳粛なもの」という表現に留意して説明せよ。
（編集部注：解答欄は173ミリ×36ミリ）

問1

問2

問3

問4

例題 3-1

大学入学共通テスト対策の実践①

柏木博『視覚の生命力――イメージの復権』
呉谷充利『ル・コルビュジエと近代絵画――二〇世紀モダニズムの道程』（大学入学共通テスト）

―― 時間 ――
20分

次の【文章Ⅰ】は、正岡子規の書斎にあったガラス障子と建築家ル・コルビュジエの建築物における窓について考察したものである。また、【文章Ⅱ】は、ル・コルビュジエの窓について【文章Ⅰ】とは別の観点から考察したものである。どちらの文章にもル・コルビュジエ著『小さな家』からの引用が含まれている（引用文中の（中略）は原文のままである）。これらを読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合で表記を一部改めている。

【文章Ⅰ】

寝返りさえ自らままならなかった子規にとっては、室内にさまざまなものを置き、それをながめることが楽しみだった。そして、ガラス障子のむこうに見える庭の植物や空を見ることが慰めだった。味覚のほかは視覚こそが子規の自身の存在を確認する感覚だった。子規は、視覚の人だったともいえる。障子の紙をガラスに入れ替えることで、A子規は季節や日々の移り変わりを楽しむことができた。

*『墨汁一滴』の三月一二日には「不平十ケ条」として、「板ガラスの日本で出来ぬ不平」と書いている。この不平を述べている一九〇一（明治三四）年、たしかに日本では板ガラスは製造していなかったようだ。*石井研堂の『増訂明治事物起原』には、「（明治）三十六年、原料も総て本邦のものにて、完全なる板硝子を製出せり。大正三年、欧州大戦の影響、本邦の輸入硝子は其船便を失ふ、是に於て、旭硝子製造会社等の製品が、漸く用ひらるることとなり、わが板硝子界は、大発展を遂ぐるに至れり」とある。

これによると板ガラスの製造が日本で始まったのは、一九〇三年ということになる。子規が不平を述べた二年後である。してみれば、*虚子のすすめで子規の書斎（病室）に入れられた「ガラス障子」は、輸入品だったのだろう。高価なものであったと思われる。高価であってもガラス障子にすることで、子規は、庭の植物に季節の移ろいを見ることができ、青空や雨をながめることができるようになった。ほとんど寝たきりで身体を動かすことができなくなり、絶望的な気分の中で自殺することも頭によぎっていた子規。彼の書斎（病室）は、ガラス障子によって「見ることのできる装置（室内）」あるいは「見るための装置（室内）」へと変容したのである。

映画研究者の*アン・フリードバーグは、『ヴァーチャル・ウインドウ』の（ア）――ボウトウで、「窓」は「フレーム」であり「スクリーン」でもあるといっている。

窓はフレームであるとともに、プロセニアム〔舞台と客席を区切る額縁状の部分〕でもある。窓の縁〔エッジ〕が、風景を切り取る。窓は外界を二次元の平面へと変える。つまり、窓はスクリーンとなる。窓と同様に、スクリーンは平面であると同時にフレーム――映像〔イメージ〕が投影される反射面であり、視界を制限するフレーム――でもある。スクリーンは建築のひとつの構成要素であり、新しいやり方で、壁の通風を演出する。

子規の書斎は、ガラス障子によるプロセニアムがつくられたのであり、それは外界を二次元に変えるスク

リーンでありフレームとなったのである。[B]ガラス障子は「視覚装置」だといえる。

子規の書斎（病室）の障子をガラス障子にすることで、その室内は「視覚装置」となったわけだが、実のところ、外界をながめることのできる「窓」は、視覚装置として、建築・住宅にもっとも重要な要素としてある。

建築家のル・コルビュジエは、いわば視覚装置としての「窓」をきわめて重視していた。そして、彼は窓の構成こそ、建築を決定しているとまで考えていた。したがって、子規の書斎（病室）とは比べものにならないほど、ル・コルビュジエは、視覚装置としての窓の多様性を、デザインつまり表象として実現していった。とはいえ、窓が視覚装置であるという点においては、子規の書斎（病室）のガラス障子といささかもかわることはない。しかし、ル・コルビュジエは、住まいを徹底した視覚装置、まるでカメラのように考えていたという点では、子規のガラス障子のようにおだやかなものではなかった。子規のガラス障子は、フレームではあっても、操作されたフレームではない。他方、[C]ル・コルビュジエの窓は、確信を持ってつくられたフレームであった。

ル・コルビュジエは、ブエノス・アイレスで(イ)行った講演のなかで、「建築の歴史を窓の各時代の推移で示してみよう」といい、また窓によって「建築の性格が決定されてきたのです」と述べている。そして、古代ポンペイの出窓、ロマネスクの窓、ゴシックの窓、さらに一九世紀パリの窓から現代の窓のあり方までを歴史的に検討してみせる。そして「窓は採光のためにあり、換気のためではない」とも述べている。こうしたル・コルビュジエの窓についての言説について、アン・フリードバーグは、ル・コルビュジエのいう住宅は「住むための機械」であると同時に、それはまた「見るための機械でもあった」のだと述べている。さらに、ル・コルビュジエは、窓に換気ではなく「視界と採光」を優先したのであり、それは「窓のフレームと窓の形、すなわち「アスペクト比」の変更を引き起こした」と指摘している。ル・コルビュジエは窓を、外界を切り取るフレームだと捉えており、その結果、窓の形、そして「アスペクト比」（ディスプレイの長辺と短辺の比）が変化したというのである。

実際彼は、両親のための家をレマン湖のほとりに建てている。まず、この家は、塀（壁）で囲まれているのだが、これについてル・コルビュジエは、次のように記述している。

囲い壁の存在理由は、北から東にかけて、さらに部分的に南から西にかけて視界を閉ざすためである。四方八方に蔓延する景色というものは圧倒的で、焦点をかき、長い間にはかえって退屈なものになってしまう。このような状況では、もはや〝私たち〟は風景を〝眺める〟ことができないのではなかろうか。景色を(ウ)望むには、むしろそれを限定しなければならない。思い切った判断によって選別しなければならないのだ。すなわち、まず壁を建てることによって視界を遮ぎり、つぎに連らなる壁面を要所要所取り払い、そこに水平線の広がりを求めるのである。

（*『小さな家』）

風景を見る「視覚装置」としての窓（開口部）と壁をいかに構成するかが、ル・コルビュジエにとって課題であったことがわかる。

（柏木博『視覚の生命力――イメージの復権』による）

【文章Ⅱ】

一九二〇年代の最後期を飾る初期の古典的作品*サヴォア邸は、見事な*プロポーションをもつ「横長の窓」を示す。が一方、「横長の窓」を内側から見ると、それは壁をくりぬいた窓であり、その意味は反転する。そ

れは四周を遮る壁体となる。「横長の窓」は、「横長の壁」となって現われる。「横長の窓」は一九二〇年代から一九三〇年代に入ると、「全面ガラスの壁面」へと移行する。*スイス館がこれをよく示している。しかしながらスイス館の屋上庭園の四周は、強固な壁で囲われている。大気は壁で仕切られているのである。

かれは初期につぎのようにいう。「住宅は沈思黙考の場である」。あるいは「人間には自らを消耗する〈仕事の時間〉があり、自らをひき上げて、心の(エ)キンセンに耳を傾ける〈瞑想の時間〉とがある」。

これらの言葉には、いわゆる近代建築の理論においては説明しがたい一つの空間論が現わされている。一方は、いわば光の(オ)ウトんじられる世界であり、他方は光の溢れる世界である。つまり、前者は内面的な世界に、後者は外的な世界に関わっている。

かれは『小さな家』において「風景」を語る：「ここに見られる囲い壁の存在理由は、北から東にかけて、さらに部分的に南から西にかけて視界を閉ざすためである。四方八方に蔓延する景色というものは圧倒的で、焦点をかき、長い間にはかえって退屈なものになってしまう。このような状況では、もはや〝私たち〟は風景を〝眺める〟ことができないのではなかろうか。景色を望むには、むしろそれを限定しなければならない。（中略）北側の壁と、そして東側と南側の壁とが〝囲われた庭〟を形成すること、これがここでの方針である」。

ここに語られる「風景」は動かぬ視点をもっている。かれが多くを語った「動く視点」にたいするこの「動かぬ視点」は風景を切り取る。視点と風景は、一つの壁によって隔てられ、そしてつながれる。風景は一点から見られ、眺められる。D壁がもつ意味は、風景の観照の空間的構造化である。この*動かぬ視点theōriaの存在は、かれにおいて即興的なものではない。

サヴォア邸

かれは、住宅は、沈思黙考、美に関わると述べている。初期に明言されるこの思想は、明らかに動かぬ視点をもっている。その後の展開のなかで、沈思黙考の場をうたう住宅論は、動く視点が強調されるあまり、ル・コルビュジエにおいて影をひそめた感がある。しかしながら、このテーマはル・コルビュジエが後期に手がけた*「礼拝堂」や「修道院」において再度主題化され、深く追求されている。「礼拝堂」や「修道院」は、なによりも沈思黙考、瞑想の場である。つまり、後期のこうした宗教建築を問うことにおいて、動く視点にたいするル・コルビュジエの動かぬ視点の意義が明瞭になる。

（呉谷充利『ル・コルビュジエと近代絵画――二〇世紀モダニズムの道程』による）

（語注）
*『墨汁一滴』＝正岡子規（一八六七―一九〇二）が一九〇一年に著した随筆集。
*石井研堂＝ジャーナリスト、明治文化研究家（一八六五―一九四三）。
*虚子＝高浜虚子（一八七四―一九五九）。俳人、小説家。正岡子規に師事した。
*アン・フリードバーグ＝アメリカの映像メディア研究者（一九五二―二〇〇九）。
*『小さな家』＝ル・コルビュジエ（一八八七―一九六五）が一九五四年に著した書物。自身が両親のためにレマン湖のほとりに建てた家について書かれている。
*サヴォア邸＝ル・コルビュジエの設計で、パリ郊外に建てられた住宅。
*プロポーション＝つりあい。均整。
*スイス館＝ル・コルビュジエの設計で、パリに建てられた建築物。

＊動かぬ視点theōria＝ギリシア語で、「見ること」「眺めること」の意。
＊「礼拝堂」や「修道院」＝ロンシャンの礼拝堂とラ・トゥーレット修道院を指す。

問1　次の（ⅰ）・（ⅱ）の問いに答えよ。

（ⅰ）傍線部（ア）・（エ）・（オ）に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

（ア）ボウトウ
① 流行性のカンボウにかかる　② 今朝はネボウしてしまった
③ 過去をボウキャクする　④ 経費がボウチョウする

（エ）キンセン
① ヒキンな例を挙げる　② 食卓をフキンで拭く
③ モッキンを演奏する　④ 財政をキンシュクする

（オ）ウトんじられる
① 裁判所にテイソする　② 地域がカソ化する
③ ソシナを進呈する　④ 漢学のソヨウがある

（ⅱ）傍線部（イ）・（ウ）と同じ意味を持つものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

（イ）行った
① 行シン　② 行レツ　③ リョ行　④ リ行

（ウ）望む
① ホン望　② ショク望　③ テン望　④ ジン望

問2　傍線部A「子規は季節や日々の移り変わりを楽しむことができた」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 病気で絶望的な気分で過ごしていた子規にとって、ガラス障子越しに外の風物を眺める時間が現状を忘れるための有意義な時間になっていたということ。
② 病気で塞ぎ込み生きる希望を失いかけていた子規にとって、ガラス障子から確認できる外界の出来事が自己の救済につながっていったということ。
③ 病気で寝返りも満足に打てなかった子規にとって、ガラス障子を通して多様な景色を見ることが生を実感する契機となっていたということ。
④ 病気で身体を動かすことができなかった子規にとって、ガラス障子という装置が外の世界への想像をかき立ててくれたということ。
⑤ 病気で寝たきりのまま思索していた子規にとって、ガラス障子を取り入れて内と外が視覚的につながったことが作風に転機をもたらしたということ。

問3　傍線部B「ガラス障子は『視覚装置』だといえる。」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① ガラス障子は、季節の移ろいをガラスに映すことで、隔てられた外界を室内に投影して見る楽しみを喚起する仕掛けだと考えられるから。

② ガラス障子は、室外に広がる風景の範囲を定めることで、外の世界を平面化されたイメージとして映し出す仕掛けだと考えられるから。

③ ガラス障子は、外の世界と室内とを切り離したり接続したりすることで、視界に入る風景を制御する仕掛けだと考えられるから。

④ ガラス障子は、視界に制約を設けて風景をフレームに収めることで、新たな風景の解釈を可能にする仕掛けだと考えられるから。

⑤ ガラス障子は、風景を額縁状に区切って絵画に見立てることで、その風景を鑑賞するための空間へと室内を変化させる仕掛けだと考えられるから。

問4　傍線部C「ル・コルビュジエの窓は、確信を持ってつくられたフレームであった」とあるが、「ル・コルビュジエの窓」の特徴と効果の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① ル・コルビュジエの窓は、外界に焦点を合わせるカメラの役割を果たすものであり、壁を枠として視界を制御することで風景がより美しく見えるようになる。

② ル・コルビュジエの窓は、居住性を向上させる機能を持つものであり、採光を重視することで囲い壁に遮られた空間の生活環境が快適なものになる。

③ ル・コルビュジエの窓は、アスペクト比の変更を目的としたものであり、外界を意図的に切り取ることで室外の景色が水平に広がって見えるようになる。

④ ル・コルビュジエの窓は、居住者に対する視覚的な効果に配慮したものであり、囲い壁を効率よく配置することで風景への没入が可能になる。

⑤ ル・コルビュジエの窓は、換気よりも視覚を優先したものであり、視点が定まりにくい風景に限定を施すことでかえって広がりが認識されるようになる。

問5　傍線部D「壁がもつ意味は、風景の観照の空間的構造化である。」とあるが、これによって住宅はどのような空間になるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 三方を壁で囲われた空間を構成することによって、外光は制限されて一方向からのみ部屋の内部に取り入れられる。このように外部の光を調整する構造により、住宅は仕事を終えた人間の心を癒やす空間になる。

② 外界を壁と窓で切り取ることによって、視点は固定されてさまざまな方向から景色を眺める自由が失われる。このように壁と窓が視点を制御する構造により、住宅はおのずと人間が風景と向き合う空間になる。

③ 四周の大部分を壁で囲いながら開口部を設けることによって、固定された視点から風景を眺めることが可能になる。このように視界を制限する構造により、住宅は内部の人間が静かに思索をめぐらす空間になる。

④　四方に広がる空間を壁で限定することによって、選別された視角から風景と向き合うことが可能になる。このように一箇所において外界と人間がつながる構造により、住宅は風景を鑑賞するための空間になる。

⑤　周囲を囲った壁の一部を窓としてくりぬくことによって、外界に対する視野に制約が課せられる。このように壁と窓を設けて内部の人間を瞑想へと誘導する構造により、住宅は自己省察するための空間になる。

問6　次に示すのは、授業で【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読んだ後の、話し合いの様子である。これを読んで、後の（ⅰ）～（ⅲ）の問いに答えよ。

生徒A――【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、両方ともル・コルビュジエの建築における窓について論じられていたね。

生徒B――【文章Ⅰ】にも【文章Ⅱ】にも同じル・コルビュジエからの引用文があったけれど、少し違っていたよ。

生徒C――よく読み比べると、［　X　］。

生徒B――そうか、同じ文献でもどのように引用するかによって随分印象が変わるんだね。

生徒C――【文章Ⅰ】は正岡子規の部屋にあったガラス障子をふまえて、ル・コルビュジエの話題に移っていた。

生徒B――なぜわざわざ子規のことを取り上げたのかな。

生徒A――それは、［　Y　］のだと思う。

生徒B――なるほど。でも、子規の話題は【文章Ⅱ】の内容ともつながるような気がしたんだけど。

生徒C――そうだね。【文章Ⅱ】と関連づけて【文章Ⅰ】を読むと、［　Z　］と解釈できるね。

生徒A――こうして二つの文章を読み比べながら話し合ってみると、いろいろ気づくことがあるね。

（ⅰ）　空欄［　X　］に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

①　【文章Ⅰ】の引用文は、壁による閉塞とそこから開放される視界についての内容だけど、【文章Ⅱ】の引用文では、壁の圧迫感について記された部分が省略されて、三方を囲んで形成される壁の話に接続されている

②　【文章Ⅰ】の引用文は、視界を遮る壁とその壁に設けられた窓の機能についての内容だけど、【文章Ⅱ】の引用文では、壁の機能が中心に述べられていて、その壁によってどの方角を遮るかが重要視されている

③　【文章Ⅰ】の引用文は、壁の外に広がる圧倒的な景色とそれを限定する窓の役割についての内容だけど、【文章Ⅱ】の引用文では、主に外部を遮る壁の機能について説明されていて、窓の機能には触れられていない

④　【文章Ⅰ】の引用文は、周囲を囲う壁とそこに開けられた窓の効果についての内容だけど、【文章Ⅱ】の引用文では、壁に窓を設けることの意図が省略されて、視界を遮って壁で囲う効果が強調されている

（ii）空欄 Y に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

① ル・コルビュジエの建築論が現代の窓の設計に大きな影響を与えたことを理解しやすくするために、子規の書斎にガラス障子がもたらした変化をまず示した

② ル・コルビュジエの設計が居住者と風景の関係を考慮したものであったことを理解しやすくするために、子規の日常においてガラス障子が果たした役割をまず示した

③ ル・コルビュジエの窓の配置が採光によって美しい空間を演出したことを理解しやすくするために、子規の芸術に対してガラス障子が及ぼした効果をまず示した

④ ル・コルビュジエの換気と採光についての考察が住み心地の追求であったことを理解しやすくするために、子規の心身にガラス障子が与えた影響をまず示した

（iii）空欄 Z に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

① 病で絶望的な気分の中にいた子規は、書斎にガラス障子を取り入れることで内面的な世界を獲得したと言える。そう考えると、子規の書斎もル・コルビュジエの主題化した宗教建築として機能していた

② 病で外界の眺めを失っていた子規は、書斎にガラス障子を取り入れることで光の溢れる世界を獲得したと言える。そう考えると、子規の書斎もル・コルビュジエの指摘する仕事の空間として機能していた

③ 病で自由に動くことができずにいた子規は、書斎にガラス障子を取り入れることで動かぬ視点を獲得したと言える。そう考えると、子規の書斎もル・コルビュジエの言う沈思黙考の場として機能していた

④ 病で行動が制限されていた子規は、書斎にガラス障子を取り入れることで見るための機械を獲得したと言える。そう考えると、子規の書斎もル・コルビュジエの住宅と同様の視覚装置として機能していた

問1	(i)	(ア)	① ② ③ ④
		(エ)	① ② ③ ④
		(オ)	① ② ③ ④
	(ii)	(イ)	① ② ③ ④
		(ウ)	① ② ③ ④
問2			① ② ③ ④ ⑤
問3			① ② ③ ④ ⑤
問4			① ② ③ ④ ⑤
問5			① ② ③ ④ ⑤
問6	(i)		① ② ③ ④
	(ii)		① ② ③ ④
	(iii)		① ② ③ ④

写真提供　㈱アフロ

例題 3-2

大学入学共通テスト対策の実践②

室生犀星「陶古の女人」（大学入学共通テスト）

時間 20分

次の文章は、室生犀星「陶古の女人」（一九五六年発表）の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

この*信州の町にも美術商と称する店があって、彼は散歩の折に店の中を覗いて歩いたが、よしなき壺に眼をとめながら何という意地の汚なさであろうと自分でそう思った。見るべくもない*陶画をよく見ようとする、何処までも定見のない自分に惘れていた、彼はこれらのありふれた壺に、ちょっとでも心が惹かれることは、行きずりの女の人に眼を惹かれる美しさによく似ている故をもって、郷愁という名称をつけていた。*天保から明治にかけてのざらにある*染付物や、*李朝後期のちょっとした壺の染付などに、彼はいやしく眼をさらして、思い返して何も買わずに店を立ち去るのであるが、A何ももとめる物も、見るべき物もない折のさびしさはなかなかであった。東京では陶器の店のあるところでは時間をかけて見るべきものもあるが、田舎の町では何も眼にふれてくるものは、なかった。そういう気持できょうも家まで帰って来ると、庭の中に一人の青年紳士が立っていた。服装もきちんとし眼のつかい方にも、この若い男の生い立ちの宜さのほどが見えた。手には相当に大きい*尺もある箱の包をさげていた。かれは初めてお伺いする者だが、ちょっと見ていただきたい物があってお忙しいとは知りながらお訪ねしたといった。彼はこの青年の眼になにかに飢えているものを感じて、その飢えは金銭にあることがその箱の品物と関聯して直ぐに感じられた。彼は何を見せにお見えになったのか知らんが、僕は何も見たい物なんかないといい、これから仕事にかからなければならないから、些んのちょっとの間だけお会いするといって、客を茶の間に通した。彼はどういう場合にも居留守をつかったことはないし、会えないといって客を突き帰すことをしなかった。二分間でも三分間でも会って非常な速度で用件を聞いてから、いい事なら即答をしてやっていた。そして率直にいま仕事中だからこれだけ会ったのだからお帰りというのがつねである。一人の訪客に*女中やら娘やらが廊下を行ったり来たりして、会うとか会わんとかという事でごたごたした気分がいやであった。会えば二三分間で済むことであり遠方から来た人も、会ってさえ貰えば素直に帰ってゆくのである。だからきょうの客にも彼は一体何を僕に見てくれというのかと訊くと、客は言下に陶器を一つ見ていただきたいのですといった。陶器にも種類がたくさんにあるが何処の物ですかというと、*青磁でございますといった。彼は客の眼に注意してみたが先刻庭の中で見かけた飢えたものがなくなり、穏かになっていた。どうやら彼の穏かさは箱の中の青磁に原因した落着きにあるらしい、客はむしろ無造作に箱の中からもう一度包んだ絹のきれをほどきはじめた、そして黄いろい絹の包の下から、突然とろりとした濃い乳緑の青磁どくとくの*釉調が、ひろがった。絹のきれが全く除けられてしまうと、そこにはだかのB*雲鶴青磁が*肩衝もなめらかに立っているのを見た。彼は陶器が裸になった羞かしさを見たことがはじめてであった。彼はこの*梅瓶に四羽の鶴の飛び立っているのに見入った。一羽はすでに雲の上に出てようやくに疲れて、もう昇るところもない満足げなものに見えた。またの一羽は雲の中からひと呼吸に飛翔するゆるやかさが、二つならべて伸した長い脚のあたりに、ちからを抜いている状態のものであった。そして第三羽の鶴は白い雲の中から烈しい啼き声を発して、遅れまいとして熱っぽい翼際の骨のほてりまでが見え、とさかの黒い立ち毛は低く、蛇の頭のような平たい鋭さを現わしていた。最後の一羽にあるこの鳥の念願のごとき飛翔状態

は、とさかと同じ列に両翼の間から伸べられた脚までが、平均された一本の走雲のような平明さをもって、はるかな雲の間を目指していた。それらの凡ての翼は白くふわふわしていて、最後の一羽のごときは長い脚の爪までが燃えているようであった。彼はこの恐ろしい雲鶴青磁を見とどけた時の寒気が、しばらく背中にもむねからも去らないことを知った。客の青年は穏かな眼の中にたっぷりと構えた自信のようなものを見せて、これは本物でしょうかと取りようによっては、C幾らかのからかい気分まで見せていった。併しそれはあまりに驚きが大きかったために、彼がそういう邪推をしてうけとったものかも知れなかった。彼は疑いもなくこれは雲鶴青磁であり逸品であるといい、これはお宅にあったものかと訊くと、終戦後にいろいろ売り払ったなかに、これが一つ最後まで売り残されていた事、売り残されているからには父が就中、たいせつにしていた物だが、二年前父の死と同時に*わすられて了っている事を青年はいったが、その時ふたたびこの若い男の眼に飢えたような例のがつがつしたものが、うかべられた。そして青年は実は私個人の事情でこの青磁を売りたいのですが、時価はどれだけするものか判らないが私は三万円くらいに売りたいと思っているんです。町の美術商では二万円くらいならというんですが……私は或る随筆を読んであなたに買って貰えば余処者の手に渡るよりも嬉しいと思って上ったのだとかれは言った。彼は二万や三万どころではなく最低二十万円はするものだ、或いは二十五万円はするものかも知れない、それなのにたった三万円で売ろうとしているのに、彼は例の飢えたような眼に何かを突き当てて見ざるをえないし、当然うけとるべき金を知らずにうけとらないということに、正義をも併せて感じた。君はこの雲鶴梅瓶を君だけの意志で売ろうとなさるか、それとも、先刻、お話のお母上の意志も加って居るのかどうかと聞くと、青年は私だけの考えで母はこの話は一さい知らないのだといい、若し母が知ってもひどくは咎めない筈です、私はいま勤めていて母を見ているし、私のすることで誰も何もいいはしないと彼はいい、若し三万円が無理なら商店の付値と私の付値の中間で結構なのです、外の人の手に渡すよりあなたのお手元にあれば、そのことで父が青磁を愛していたおもいも、そこにとどまるような気もして、あんしんしてお預けできる気がするのですと、Dその言葉に真率さがあった。文学者なぞ遠くから見ていると、こんな信じ方をされているのかと思った。彼は言った、君は知らないらしいが、実は僕の見るところではこれだけの逸品は、最低二十万円はらくにするものだろう、そしてこの青磁がどんなにやすく見つもっても、十五万円はうけとるべき筈です、決して避暑地なぞで売る物ではなく一流の美術商に手渡しすべき物です、ここまでお話したからには、僕は決して君を騙すような買い方をする事は出来ない、お父上が買われた時にも相当以上に値のしたものであろうし、三万円で買い落すということは君を欺すことと同じことになりますと彼は言い、更に或る美術商の人が言ったことばに陶器もすじの通ったものは、地所と同じ率で年々にその価格が*上騰してゆくそうだが、全くその通りですね、そういう事になれば当然君は市価と同じ価格をうけとらねばならない、とすると僕にはそういう金は持合せていないし、勢い君は確乎とした美術商に当りをつける必要がある、彼はこういって青年の方に梅瓶をそっとずらせた。青年は彼のいう市価の高い格にぞっとして驚いたらしかったが、唾をのみ込んでいった。たとえ市価がどうあろうとも一たん持参した物であるから、私の申出ではあなたのお心持を添えていただけば、それで沢山なのです、たとえ、その価格がすくないものであっても苦情は申しませんと、真底からそう思っているらしくいったが、彼は当然、価格の判定しているものに対して、人をだますような事は出来ない、東京に信用の*於ける美術商があるからと彼は其処に、一通の紹介状を書いて渡した。

　客は間もなく立ち去ったが、彼はその後で損をしたような気がし、Eその気持が不愉快だった。しかも青年の持参した雲鶴青磁は、彼の床の間にある梅瓶にくらべられる逸品であり、*再度と手にはいる機会の絶無の物であった。人の物がほしくなるのが愛陶のこころ根であるが、当然彼の手にはいったも同様の物を、まんま

と彼自身でそれの*入手を反らしたことが、惜しくもあった。対手が承知していたら構わないと思ったものの、やすく手に入れる*身そぼらしさ、多額の金をもうけるような仕打を自分の眼に見るいやらしさ、文学を勉強した者のすることでない汚なさ、それらは結局彼にあれはあれで宜かったのだ、自分をいつわることを、一等好きな物を前に置いて、それをそうしなかったことが、誰も知らないことながら心までくさっていないことが、喜ばしかった。F 因縁がなくてわが書斎に佇むことの出来なかった四羽の鶴は、その生きた烈しさが日がくれかけても、昼のように*皓々として眼中にあった。

（語注）
*信州＝信濃国（現在の長野県）の別称。
*陶画＝陶器に描いた絵。
*天保＝江戸時代後期の元号。一八三〇―一八四四年。
*染付物＝藍色の顔料で絵模様を描き、その上に無色のうわぐすりをかけて焼いたもの。うわぐすりとは、素焼きの段階の陶磁器の表面に塗る薬品。加熱すると水の浸透を防ぎ、つやを出す。
*李朝後期＝美術史上の区分で、一八世紀半ばから一九世紀半ばまでの時期を指す。
*尺＝長さの単位。一尺は、約三〇センチメートル。
*女中＝雇われて家事をする女性。当時の呼称。
*青磁＝鉄分を含有した青緑色の陶磁器。
*釉調＝うわぐすりの調子。質感や視覚的効果によって得られる美感のことを指す。
*雲鶴青磁＝朝鮮半島高麗時代の青磁の一種で、白土や赤土を用いて、飛雲と舞鶴との様子を表したもの。
*肩衝＝器物の口から胴につながる部分の張り。
*梅瓶＝口が小さく、上部は丸く張り、下方に向かって緩やかに狭まる形状をした瓶。ここでは、青年が持参した雲鶴青磁のことを指している。
*わすられて＝ここでは「わすれられて」に同じ。
*上騰＝高く上がること。高騰。
*於ける＝ここでは「置ける」に同じ。
*再度と＝ここでは「二度と」に同じ。
*入手を反らした＝手に入れることができなかった、の意。
*身そぼらしさ＝みすぼらしさ。
*皓々＝明るいさま。

問1　傍線部A「何ももとめる物も、見るべき物もない折のさびしさ」とあるが、このときの「彼」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 散歩の折に美術商を覗いて意地汚く品物をあさってみても、心を惹かれるものが何も見つからないという現実の中で、東京から離れてしまった我が身を顧みて、言いようのない心細さを感じている。
② 信州の美術商なら掘り出し物があると期待して、ちょっとした品もしつこく眺め回してみたが、結局何も見つけられなかったことで自身の鑑賞眼のなさを思い知り、やるせなく心が晴れないでいる。
③ 骨董に対して節操がない我が身を浅ましいと思いながらも、田舎の町で機会を見つけてはありふれた品をも貪欲に眺め回し、東京に比べて気になるものすらないことがわかって、うら悲しくなっている。

④　時間をかけて見るべきすぐれた品のある東京の美術商とは異なり、ありふれた品物しかない田舎町での現実を前にして、かえって遠く離れた故郷を思い出し、しみじみと恋しく懐かしくなっている。
⑤　どこへ行っても求めるものに出会えず、通りすがりに覗く田舎の店の品物にまで執念深く眼を向けた自分のさもしさを認め、陶器への過剰な思い入れを続けることに、切ないほどの空虚さを感じている。

問2　傍線部B「雲鶴青磁」をめぐる表現を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

①　29行目「熱っぽい翼際の骨のほてり」、30行目「平たい鋭さ」といった感覚的な言葉を用いて鶴が生き生きと描写され、陶器を見た時の「彼」の興奮がありありと表現されている。
②　25行目「陶器が裸になった」、32～33行目「爪までが燃えているよう」など陶器から受ける印象を比喩で描き出し、高級な陶器が「彼」の視点を通じて卑俗なもののように表現されている。
③　26行目「見入った」、33行目「見とどけた」など「彼」の見る動作が繰り返し描写され、陶器に描かれている鶴の動きを分析しようとする「彼」の冷静沈着な態度が表現されている。
④　23行目「とろりと」、32行目「ふわふわして」という擬態語を用いて陶器に卑近な印象を持たせ、この陶器の穏やかなたたずまいに対して「彼」の感じた慕わしさが間接的に表現されている。
⑤　29～30行目「黒い立ち毛」、32行目「翼は白く」など陰影を強調しながらも他の色をあえて用いないことで、かえって陶器の色鮮やかさに目を奪われている「彼」の様子が表現されている。

問3　傍線部C「幾らかのからかい気分まで見せていった」について、後の（i）・（ii）の問いに答えよ。

（i）「彼」が「からかい」として受け取った内容の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

①　自分の陶器に対する愛情の強さを冷やかされていると感じた。
②　人物や陶器を見きわめる自らの洞察力が疑われていると感じた。
③　陶器を見て自分が態度を変えたことを軽蔑されていると感じた。
④　自分が陶器におののいているさまを面白がられていると感じた。
⑤　自分が陶器の価値を適切に見定められるかを試されていると感じた。

（ii）「からかい気分」を感じ取った「彼」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

①　「彼」は青磁の価値にうろたえ、態度と裏腹の発言をした青年が盗品を持参したのではないかといぶかしんだ。
②　「彼」は青磁の素晴らしさに動転し、軽妙さを見せた青年が自分をだまそうとしているのではないかと憶測した。
③　「彼」は青磁の価値に怖じ気づき、穏やかな表情を浮かべる青年が陶器を見極める眼を持っていると誤解した。
④　「彼」は青磁の素晴らしさに圧倒され、軽薄な態度を取る青年が自分を見下しているのではないかと怪しんだ。

⑤「彼」は青磁の素晴らしさに仰天し、余裕を感じさせる青年が陶器の真価を知っているのではないかと勘繰った。

問4 傍線部D「その言葉に真率さがあった」とあるが、このときの青年について「彼」はどのように受け止めているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 父の遺品を売ることに心を痛めているが、せめて陶器に理解のある人物に託すことで父の思い出を守ろうとするところに、最後まで可能性を追い求める青年の懸命さがあると受け止めている。

② 父同様に陶器を愛する人物であれば、市価よりも高い値段で青磁を買い取ってくれるだろうと期待するところに、文学者の審美眼に対して多大な信頼を寄せる青年の誠実さがあると受け止めている。

③ 父が愛した青磁の売却に際して母の意向を確認していないものの、陶器への態度が父と重なる人物を交渉相手に選ぶところに、両親への愛情を貫こうとする青年の一途さがあると受け止めている。

④ 経済的な問題があるものの、少しでも高く売り払うことよりも自分が見込んだ人物に陶器を手渡すことを優先しようとするところに、意志を貫こうとする青年の実直さがあると受け止めている。

⑤ いたしかたなく形見の青磁を手放そうとするが、適切な価格で売り渡すよりも自分が見出した人物に何としても手渡そうとするところに、生真面目な青年のかたくなさがあると受け止めている。

問5 傍線部E「その気持が不愉快だった」とあるが、「彼」がそのように感じた理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 「彼」に信頼を寄せる青年の態度に接し、東京の美術商を紹介することで誠実さを見せたものの、逸品を安価で入手する機会を逃して後悔した自分のいやしさを腹立たしく思ったから。

② 随筆を読んで父の遺品を託す相手が「彼」以外にないと信じ、初対面でも臆することなく来訪した青年の熱烈さに触れ、その期待に応えられなかった自分の狭量さにいらだちを感じたから。

③ 日々の生活苦を解消するため、父の遺品を自宅から独断で持ち出した青年の焦燥感に圧倒されるように、より高値を付ける美術商を紹介し手を引いてしまった自分の小心さに気が滅入ったから。

④ たまたま読んだ随筆だけを手がかりに、唐突に「彼」を訪ねてきた青年の大胆さを前に、逸品を入手する機会を前にしてそれに手を出す勇気を持てなかった自分の臆病さに嫌悪感を抱いたから。

⑤ 父の遺品の価値を確かめるために、「彼」の顔色をひそかに観察していた青年の態度に比べて、品物の素晴らしさに感動するあまり陶器の価値を正直に教えてしまった自分の単純さに落胆したから。

問6 傍線部F「因縁がなくてわが書斎に佇むことの出来なかった四羽の鶴は、その生きた烈しさが日がくれかけても、昼のように皓々として眼中にあった。」について、壺は青年が持ち帰ったにもかかわらず「四羽の鶴」が「眼中にあった」とはどういうことか。AさんとBさんは、【資料】を用いつつ教師と一緒に話し合いを通して考えることにした。次に示す【資料】と【話し合いの様子】について、後の(ⅰ)・(ⅱ)の問いに答えよ。

【資料】

私は又異なる例を挙げよう。この世に蒐集家と呼ばれている人は多い。併し有体に云って全幅的に頭の下る蒐集に出逢ったためしがない。中には実に珍妙なのがある。例えば猫に因んだものなら何なりと集める人がある。そういう蒐集はどうあっても価値の大きなものとはならない。なぜなのか。猫を現したものだという「こと」に興味が*集注されて、それがどんな品物であるかは問わなくなるからである。だから二目と見られぬようなくだらぬものまで集める。質よりも量なのだから、特に珍らしい品に随喜して了う。併しそれは珍らしい「こと」への興味で、それが美しい「もの」か醜い「もの」かは別に問わない。美しいものが中にあれば、それは只偶然にあるというに過ぎない。そういう蒐集は質的に*選練される見込みはない。

併しこんな愚かな蒐集を例に挙げる要はないかも知れぬ。もっと進んだ所謂「美術品」の蒐集に就いて一言する方がよい。忌憚なく云って、真に質のよい美術品の蒐集がこの世にどれだけあるのであろうか。筋の通った蒐集が少いのは、やはり集める「こと」、自分のものにする「こと」、自慢する「こと」等に余計魅力があるからなのであろう。而も標準は大概、有名なものである「こと」、時には高価なものである「こと」でさえある。「もの」を見るより、「こと」で購う。「物」をじかに見ているなら、集める物に筋が通る筈である。いつも玉石が混合して了うのは、蒐集する「こと」が先だって了うからだと思える。欲が先故、眼が曇るのだとも云える。蒐集家には明るい人が少く、何かいやな性質がつきまとう。併し「もの」に真の悦びがあったら、明るくなる筈である。悦びを人と共に分つことが多くなる筈である。蒐集家は「こと」への犠牲になってはいけない。「もの」へのよき選択者であり創作家でなければいけない。蒐集家には不思議なくらい、正しく選ぶ人が少い。

柳宗悦『「もの」と「こと」』（『工藝』一九三九年二月）の一部。なお、原文の仮名遣いを改めてある。

（語注）＊集注＝「集中」に同じ。
＊選練＝「洗練」に同じ。

【話し合いの様子】

教　師――【資料】の二重傍線部には「蒐集家は『こと』への犠牲になってはいけない。」とあります。ここでは、どういうことが批判されているのか、考えてみましょう。

Aさん――批判されているのは「猫を現したもの」なら何でも集めてしまうような「蒐集」のあり方です。

Bさん――このような「蒐集」が批判されるのは、それが［　I　］だと捉えられているからではないでしょうか。

Aさん――そうだとすると、二重傍線部の直後で述べられている「正しく選ぶ」態度とは、「こと」にとらわれることなく「もの」を見ようとする態度、と言い換えられそうです。

教　師――【資料】の中で述べられていた、「蒐集家」と「もの」との望ましい関係について把握することができました。では、この内容を踏まえると、青年の持参した陶器に対する「彼」の態度について、どのように説明できるでしょうか。

Bさん――青年が立ち去った後、その場にないはずの壺の絵が「眼中にあった」とされていることが重要ですね。結果として壺は手元に残らなかったのに、壺の与えた強い印象が「彼」の中に残ったということだと思います。

Aさん――つまり、このときの「彼」は、［Ⅱ］のですね。だから、その場にない壺の絵が「眼中にあった」という表現になるのではないでしょうか。

教　師――【資料】とあわせて考えることで、「もの」と真摯に向き合う「蒐集家」としての「彼」について、理解を深めることができたようです。

（ⅰ）空欄［Ⅰ］に入る発言として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 多くの品を集めることにとらわれて、美という観点を見失うこと
② 美しいかどうかにこだわりすぎて、関心の幅を狭めてしまうこと
③ 趣味の世界に閉じこもることで、他者との交流が失われること
④ 偶然の機会に期待して、対象との出会いを受動的に待つこと
⑤ 質も量も追い求めた結果、蒐集する喜びが感じられなくなること

（ⅱ）空欄［Ⅱ］に入る発言として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 「もの」に対する強い関心に引きずられ、「こと」への執着がいっそう強められた
② 入手するという「こと」を優先しなかったからこそ、「もの」の本質をとらえられた
③ 貴重である「こと」にこだわり続けたことで、「もの」に対する認識を深められた
④ 「もの」への執着から解放されても、所有する「こと」は諦められなかった
⑤ 所有する「こと」の困難に直面したために、「もの」から目を背けることになった

問1		① ② ③ ④ ⑤
問2		① ② ③ ④ ⑤
問3	（ⅰ）	① ② ③ ④ ⑤
	（ⅱ）	① ② ③ ④ ⑤
問4		① ② ③ ④ ⑤
問5		① ② ③ ④ ⑤
問6	（ⅰ）	① ② ③ ④ ⑤
	（ⅱ）	① ② ③ ④ ⑤